



Title	隠喩と意味
Author(s)	渡部, 美喜子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	修士(文学)
Issue Date	2007-03-23
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/25432">https://hdl.handle.net/2115/25432</a>
Type	master thesis
File Information	master-2007.pdf



平成18年度修士論文

## 隠喩と意味

思想文化学専攻

指導教員 山田友幸

学生番号 05023020

氏名 渡部美喜子

## 論文の概要

グライスの言語哲学理論は、大きく意味の理論と含みの理論に分かれる。含みの理論においては、会話の含みの分析が中心となっている。意味の理論は話し手の意図に基礎を置く非自然的意味の理論である。意味の理論と含みの理論については、それぞれ複数の論文がある。しかし、この二つは独立に論じられているので、意味と含みの関係についてはほとんど触れられていない。しかしそのヒントとなるものとして、グライスの「続・論理と会話」には、グライスの考える発話の意味作用の全体が示されている。この意味作用の全体は「慣習的に意味されたこと」「慣習的に含みとされたこと」「非慣習的に含みとされたこと」から成り立っている。この意味作用の全体像を手がかりに考えると、これら意味作用全体の構成要素のそれぞれがグライスの意味理論の基盤となる場面意味と関係のあることがわかってくる。3つの構成要素のうち、「慣習的に意味されたこと」「慣習的に含みとされたこと」が場面意味となることはわかる。それでは「非慣習的に含みとされたこと」は場面意味となりうるのだろうか？このことを確かめるために、隠喩の意味について考察する。前述したように、グライス理論において意味と含みの関係が明確に示されていないため、一見意味と含みは別々のものであるかのように見られる。ところが、グライス理論の中で会話の含みであるとされている隠喩は、グライス理論の非自然的意味の条件を満たしていると考えられるのである。隠喩の意味については、さらにサールとデイヴィドソンの隠喩論を取り上げ、隠喩の意味が意味であるということについて考察する。

第1章では、グライスの含みの理論と意味の理論についてそれぞれ概観する。

第2章では、第1章を受け、グライスの意味作用の全体について考察する。

第3章では、第2章で問題とした「非慣習的に含みとされたこと」が場面意味となり得るかどうかを確かめるために、隠喩の意味について考察する。ここで、隠喩表現の無時間的意味は場面意味となっておらず、隠喩の意味が場面意味となっていることを示す。

第4章では、第3章に続き、隠喩の意味について考察する。隠喩の意味を意味（命題的なもの）と考えるサールと意味（命題的なもの）とは考えないデイヴィドソンの隠喩論を取り上げながら、隠喩の意味が意味であることを確認する。

ここまでで、隠喩の意味が場面意味となりうることを示されたものの、隠喩の意味だけでは「非慣習的に含みとされたこと」のごく一部に過ぎない。そこで、結論の部分では隠

喩的意味以外の含みである特殊な会話の含みが場面意味となり得ることを簡単に示し、全体のまとめをする。

本論文で特殊な会話の含み、特に隠喩的意味が場面意味となることを明らかにすることによって、グライス言語哲学の場面意味と含みの関係を部分的に明らかにすることが出来ると考えられる。そのことにより、グライス言語哲学の意味作用の全体像についてもよりいっそう明確になることと思われる。グライス理論の中で、説明がうまくいかなかった隠喩や皮肉についての問題も、これらの含みが場面意味であるということを明確にすることによって解消できるであろう。

(59415字)

## 目次

はじめに.....	5
第1章 グライスの言語哲学.....	7
1-1 グライスの含みの理論.....	8
1-2 グライスの意味の理論.....	18
第2章 含みの理論と意味の理論.....	25
2-1 グライス言語哲学の全体像.....	25
2-2 発話作用の全体と場面意味.....	30
第3章 グライス理論と隠喩的意味.....	35
3-1 含みとしての隠喩.....	35
3-2 無時間的意味と話し手の意図.....	41
3-3 隠喩的意味と話し手の意図.....	44
第4章 意味の拡張としての隠喩的意味.....	48
4-1 隠喩的意味についてのさらなる考察.....	48
4-2 サールの隠喩論.....	50
4-3 デイヴィドソンの隠喩論.....	56
結論.....	65
参考文献.....	69

## はじめに

ポール・グライス(1913-1988)の言語哲学上の仕事は、哲学のみならず言語学にも影響を与えている。とりわけ有名なのは会話の理論であり、これは会話の含みに関するものである。グライスの言語哲学に関する論文はそのほとんどが、論文集「Studies in the Way of Words(邦訳:『論理と会話』)」に収められている。それによると、グライスの言語哲学は大きく意味の理論と会話の含みの理論に分かれる。

含みの理論は発話や文の中ではっきりと言い表されていないが、話し手がほのめかしたり、含みとしたことに関する理論である。有名な会話の理論は、この中に含まれる会話の含みの理論である。グライスは、話し手がほのめかしたり、含みとしたことを協調の原理と会話の格率という装置を用いて、文や発話の慣習的な意味から割り出すことが出来るものとして説明した。

意味の理論は非自然的な意味の理論である。グライスは、まず最初に自然的意味と非自然的意味とを区別し、次いで非自然的に意味するための話し手の意図の条件を設定した。グライスによると、発話の意味は非自然的意味であり、それは、話し手がある特定の場面で意味したという場面意味に帰着する。そしてこの場面意味は話し手の意図の条件によって説明できるというのである。

この意味と含みの二つの理論を合わせたものがグライスの言語理論の全体ということになるのだが、グライスには意味と含みを同時に扱い、意味と含みを関係付けて論じたものがない。そのため、言語に関するグライスの理論の全体像は非常に把握しにくいものとなっている。

グライス言語哲学の全体像については「続・論理と会話」の冒頭に記述されている発話の意味作用の全体がヒントとなる。発話の意味作用の全体は「慣習的に言ったこと」「慣習的に含みとされたこと」「非慣習的に含みとされたこと」からなるのだが、これらそれぞれの意味作用と先ほど意味の理論で触れた場面意味との関係が問題となる。特に、「非慣習的に含みとされたこと」と場面意味との関係が問題である。この非慣習的に含みとされたことの中には、会話の含みが入る。

ここで鍵となるのが隠喩である。隠喩的意味はグライスの含みの理論では会話の含みとされているものだが、同時に、場面意味となっているように思われるからである。そこで論文の後半では隠喩を取り上げ、隠喩的意味と場面意味との関係を調べ、隠喩的意味が場面意味であることを示したいと思う。さらに、隠喩的意味を意味とする立場のサールと意味と認めない立場のデイヴィッドソンの議論を取り上げ、二人の議論から隠喩的意味が意味であることについて確認す

る。

この論文の全体の流れは次のようになる。

第1章ではグライスの含みの理論と意味の理論を概観する。ここでは協調の原理、会話の格率を紹介し、これらを使って含みを割り出すパターンについて具体的な例を挙げながら見ていく。意味の理論については、最初に自然的な意味(自然的に意味すること)と非自然的な意味(非自然的に意味すること)の区別をみる。さらに、言語の意味である非自然的意味の条件である話し手の意図の三つの条件を見る。

第2章ではグライスの言う発話意味作用全体を取り上げ、グライスの言語哲学の全体像について考察する。ここで非慣習的な含みと場面意味についての問題提起をする。

第3章では第2章を受け、隠喩の意味についてグライス理論に沿って考察する。ここでは隠喩の無時間的意味が非自然的意味の三つの意図を満たしておらず、含みである隠喩の意味が含みであると同時に非自然的意味に必要な話し手の三つの意図を満たしていることを確認する。

第3章では、隠喩の意味そのものについて考察する。ここでは、グライス理論を離れても隠喩の意味が隠喩の意味であるということについて論じたい。そこで、隠喩の意味は意味でないとするデイヴィドソンの隠喩論と、隠喩の意味を意味であるとするサールの隠喩論を取り上げる。この二人の議論を通して、隠喩の意味が隠喩文の意味であること、隠喩の解釈は字義の意味から隠喩の意味へと至ったときに始めて完結すること、それゆえ隠喩の真理値は字義の意味ではなく、隠喩の意味に至って初めて問えることなどを論ずる。

結論部では、第4章までの議論をもとに隠喩以外の会話の含みについても場面意味となり得るのかということについて簡単に検討する。

## 第1章 グライスの言語哲学

ポール・グライスの言語哲学には意味の理論と会話の含みの理論がある。意味の理論は非言語的な「意味すること(meaning)」の事例を使って自然的意味と非自然的意味の区別を導入した後、自然的意味(natural meaning)と非自然的意味(non-natural meaning)との区分を経て、非自然的意味である言語の意味について論じていく。言語の意味は場面意味によって説明でき、場面意味は話し手の意図によって説明できるというのが、グライス理論の基本的な考え方である。場面意味とは発話者がある特定の場面で意味した内容のことである。

意味の理論がある一方で、他方に会話の含みの理論がある。会話の含み(conversational implicature)とは 文や語によって直接言い表されていないが、文や語によって直接言い表されている内容から聞き手が把握できる内容のことである。会話の含みの理論はこの会話の含みをどのようにして語や文の直接的な意味から導き出すのかを理論化し、含みについて分析している。そのために使われたのが、有名な協調の原理(Cooperative Principle)と会話の格率(Conversational Maxims)である。なお後に見るように、含みには会話の含み以外にも慣習的な含みがあるが、この論文では主として会話の含みを扱う。そこで、特に断らない限り、単に「含み」と書いて会話の含みを意味することにしたい。

グライスの言語に関する理論はその論文集「Studies in the Way of Words(邦訳:『論理と会話』)」に収められている。この中で、「発話者の意味と意図(Utterer's Meaning and Intentions)」、「発話者の意味・文の意味・語の意味(Utterer's Meaning, Sentence Meaning, and Word Meaning)」、「意味(Meaning)」、「意味再論(Meaning Revisited)」は意味の理論に関する論文であり、「論理と会話(Logic and Conversation)」、「続・論理と会話(Further Notes for Logic and Conversation)」、「直説法条件文(Indicative Conditionals)」、「含みのためのいくつかのモデル(Some models for Implicature)」、「前提と会話の含み(Presupposition and Conversational Implicature)」は含みに関する論文である。

グライスの言語哲学の全体像を見る前に、本章では、グライスの含みの理論と意味の理論のそれぞれについて概観する。

## 1-1 グライスの含みの理論

最初に、グライスの含みの理論について概観しよう。グライスの含みの理論の概要は1975年の論文「論理と会話」に示されている。「論理と会話」によれば、含み(implicature)とは、発話者の「言った」ことではなく、はっきりと言い表されずにその文や発話に伴う内容のことである。グライスによれば、含みには慣習的な含み(conventional implicature)と非慣習的な含みがあり、非慣習的な含みには、会話の含み(conversational implicature)とそうでないものがある。さらに、会話の含みには、特殊な会話の含みと一般的な会話の含みがある。<sup>1</sup>ここでは、特殊な会話の含みとその発話文からの割り出しについて、また、特殊な会話の含みの割り出しに必要となる協調の原理(Cooperative Principle)と会話の格率(Conversational Maxims)について概観する。その理由は二つある。一つ目に、含みの理論の中心となるのは「特殊な会話の含み(perticularized conversational implicature)」であり、それゆえグライスも含みの説明に当たって「特殊な会話の含み」を最初に取り上げているからである。二つ目には、この「特殊な会話の含み」を後に意味との関連で取り上げようと考えているからである。

グライスは含みをはっきりと定義していない。「論理と会話」の中でも含みのはっきりとした定義はなされていない。グライスは言葉によって含みを定義するよりも、例を挙げながら含みとはどういうものかを説明している。

---

<sup>1</sup> 「特殊な会話の含み」に対し、グライスは「一般的な会話の含み(generalized conversational implicature)」を区別する。グライスが例に挙げているのは、次のようなものである。

「Xは今晚ある女性(a woman)と会うことになっている」という形式の文を用いる人は普通、会う相手がXの妻でも母でも姉妹でもなく、また親しいプラトニックな付き合いの女性でもないことを含みとしている。同様に、もしも私が、「Xはきのうあるいえ(house)に入り、正面のドアを開けたところにかめを見つけた」というなら、聞き手は普通、少し後でその家がX自身の家であることを私が明かせば驚くことだろう。「庭(a garden)」「車(a car)」「大学(a college)」等々の表現を使っても類似の言語現象を作り出せるだろう。(『論理と会話』原書37-38ページ、邦訳54-55ページ)

このような一般的な会話の含み(generalized conversational implicature)は、グライス自身も述べているように、本文で次に見る慣習的な含み(conventional implicature)と取り違えやすい。慣習的な含みについては、2-1も参照されたい。

次に挙げるのは、「論理と会話」における含みの説明の冒頭に紹介されている含みの例である。<sup>2</sup>

いま、AとBが、銀行員になった共通の友人Cの話をしているとしよう。AはBに、Cの仕事ぶりをたずね、Bはこう答える。「ええ上出来だと思いますよ。彼は同僚のことが気に入っているし、まだ刑務所にも行っていない」。ここまで聞けば、Aは、Cがまだ刑務所に行っていないということでBが何を含意しているのか、何を示唆しているのか、あるいはそもそも何を意味しているのか、尋ねて当然だろう。答えは次のようにさまざまでありうる。たとえば、Cが職務柄与えられる誘惑に屈しやすい種類の人間であるとか、Cの同僚たちが実は大変不愉快で油断のならない人たちである、等々。もちろん、答えが文脈からあらかじめ明らかなきときには、AがそのようなことをBに尋ねる必要はまったくないだろう。この例においてBが何を含意、示唆、意味しているのだとしても、明らかに、それはBが言った事柄とは異なる。Bが言ったのはただ、Cがまだ刑務所に行っていないことだけである。

ここで、話し手が発話した文の慣習的意味は、「Cがまだ刑務所に行っていない」ということであり、普通に言う言葉の意味とはこれである。しかし、刑務所に行ったか行っていないかは、Cの仕事ぶりとは関係がない。そこで、話し手が言ったことの他に何かを、それも言葉から読み取ることのできる何かを「含意」したり、「示唆」したり、「意味」したりしていることになる。聞き手はそれを尋ねるかまたは推量しようとするだろう。そしてその「含意」されたり、「示唆」されたり、「意味」されたりしているものが「含み」なのである。ここでは、含みを話し手が発話した文の慣習的意味の他に含意したり、示唆したり、または意味している命題、ということにして話を進める。先の例で言うと、含みとなる命題は「Cが職務柄与えられる誘惑に屈しやすい種類の人間である」とか、「Cの同僚たちが実は大変不愉快で油断のならない人たちである」等々、ということになる。言うまでもないことだが、含みとなる命題、即ち、話し手が言ったこととは別の含みが存在しない発言もある。この場合は、話し手は自分が言ったこと以外のことを特に「含意」したり、「示唆」したり、「意味」したりはしていないのである。

「論理と会話」からもう一つ例を挙げておこう。<sup>3</sup>

---

<sup>2</sup> Grice 1991 p24,34 頁

一連の Grice の著作のページは、原著を P で、邦訳を頁で表した。

<sup>3</sup> Grice 1991 p32,46 頁

1. A: ガソリンを切らしてしまった。(I am out of petrol.)

B: すぐそこにガソリンスタンドがある。(There is a garage round the corner.)

Bの発話した文の慣習的な意味は、AとBのいる場所のすぐ近くにガソリンスタンドがあるということである。しかし、この場合Bはガソリンスタンドがあるという事実を言いたいとか、ガソリンスタンドの位置をAに伝えたいというよりも、そのガソリンスタンドが多分営業中で、そこでガソリンを入れられるということを言いたいのである。前者はBの言ったことである。後者がBが含みとしていることである。このように含みとは、一言で言えば、発話された文の慣習的意味とは別に、話し手が示唆したり、ほのめかしたり、示したりしている事柄である。

このようなグライスの含みの理論の特徴を大きく3つにまとめることができる。

まず第一に、含みは先ほど述べたように、話し手が言ったこととは別である。しかも、言ったこととは別のことを、言ったことを基にして割り出すという特徴を一般的には持っている。ただ、例外もある。皮肉や隠喩の場合である。皮肉や隠喩の場合は発話された言葉が偽であったり、不自然であったりすることから、発話された文の慣習的な意味とは別の意味を求めることになるのである。例えば皮肉の場合は、発話された文の慣習的意味の反対の意味ということになる。例えば、グライスが皮肉について次のように説明している。<sup>4</sup>

**皮肉。**これまでAと親しく付き合いしてきたXが、Aの秘密を商売敵に漏らした。Aとその聞き手はどちらもそのことを知っている。Aは「Xはいい友達だ」と言う。(注釈: Aとその聞き手には、Aの言った事柄、または表向き言った事柄が、Aの信じていない事柄であることは完全に明白であり……)

ここで、グライスが「表向き言った事柄 (what A has made as if to say)」と述べているように、皮肉の場合には、言ったことに基づくのではなく、表向き言ったことに基づくのである。<sup>5</sup>グライスは、

---

<sup>4</sup> Grice 1991 p34,49 頁

<sup>5</sup> ここで、「言ったこと」「表向き言ったこと」という区別が出てくるのは、グライスの言う意味での「言ったこと」というのが、慣習的に意味されたものであるからである。後に見るように、慣習的に意味するということとは場面意味であるということなので、「言ったこと」を話し手が言おうとしているのでなければならない。しかし隠喩や皮肉の場合、話し手が言おうとしていることは、「言ったこと」とは別にあるので、言った、と言うことにはならない。そこで、「表向き言ったこと」という表現になるのである。

隠喩の説明でも、「表向き言った事柄(what the speaker has made as if to say)」という言葉を用いており、このことは、隠喩にも当てはまる。

二つ目の特徴はグライスの含みの理論がこのはっきりと言われてはいない含みの割り出しのメカニズムを示したことである。グライスによれば、含みは、文の慣習的な意味<sup>6</sup>と協調の原理および会話の格率から割り出すことができる、ということになっている。グライスは文の慣習的意味から、はっきりとは言われていない含みを割り出すためのメカニズムを考案した。そのメカニズムにおいて主要な役割を果たすのが、協調の原理と会話の格率である。そこで、最初に協調の原理と会話の格率を見しておくことにする。順序として協調の原理が先にあり、その特殊化したものが会話の格率であると考えられるので、協調の原理から見ていく。協調の原理を提案するにあたり、言葉のやり取りは、通常はつながりのある発言からなっており、「少なくともある程度までは、協調的な企てである」<sup>7</sup>というのが、グライスの考えである。

このような会話の一般的特徴から、グライスは「協調の原理(Cooperative Principle)」を提案した。含みは、言葉の慣習的な意味と、話し手が会話の格率に違反してはいるけれども協調の原理に従って発話しているはずだという想定とから割り出すことができる、と言うのである。そこで、協調の原理と会話の格率の内容をここで述べておく。<sup>8</sup>

協調の原理とは、次のようなものである。

#### <協調の原理(Cooperative Principle)>

会話の中で発言をするときには、それがどの段階で行われるものであるかを踏まえ、また自分の携わっている言葉のやり取りにおいて受け入れられている目的あるいは方向性を踏まえた上で、当を得た発言を行うようにすべきである。

さらにグライスは、この原理を特殊化した格率として会話の格率を提案する。

#### <会話の格率>

#### 量

1 (やり取りの当面の目的のために)求められているだけの情報を提供しなさい。

<sup>6</sup> グライスが後に書いた「発話者の意味と意図」論文に基づくならば、前注で触れた「表向き言った事柄」というケースは慣習的な意味ではなく、無時間的意味に基づくことになる。

<sup>7</sup> Grice 1991 p26,37 頁

<sup>8</sup> Grice 1991 p26-27,37-39 頁

2 求められている以上の情報を提供してはならない。

**質:**「真であることを言うようにしなさい」

- 1 偽だと思ふことを言ってはならない。
- 2 十分な証拠のないことを言ってはならない。

**関連性:**「関連性のあることを言いなさい」

**様態:**「明快に言いなさい」

- 1 曖昧な表現を避けなさい。
- 2 多義的な言い方を避けなさい。
- 3 簡潔な言い方をしなさい。

上記のような協調の原理と会話の格率からどのようにして会話の含みを割り出すことができるのだろうか。

例えば次のような例がある。<sup>9</sup>

2. A: Cはどこに住んでいるんだ。(Where does C live?)

B: 南フランスのどこかだ。(Somewhere in the south of France.)

2 の会話におけるBの言葉が持つ会話の含みは、グライス理論に従えば次のようにして割り出される。

- ①この会話では、量の第一格率が守られていない。Bの与える情報量は少なすぎる。また、様態の第一格率にも反している。
- ②しかし、Bは協調の原理を遵守しているはずだ。(または守らない理由はない)。
- ③BはCの住んでいる場所について詳しい情報を知っていながら隠したり、わざとぼかして言っているわけではないだろう。
- ④BはCの住んでいる場所について南フランスという以上に詳しいことを知らないのだ。これ

---

<sup>9</sup> Grice 1991 p32, 47 頁

はBが、Cについて南フランスに住んでいることは知っているが、南フランスのどの町に住んでいるのかは知らないということを含みとしているのである。

このように含みは、一般に会話の格率への違反によって気づかれる。さらに協調の原理が遵守されているはずだと仮定することによって、聞き手はもう一つの発話の筋道を見つけ出すのである。もう少し具体的に説明すると、まず最初に会話の格率は破られているところがあるが、協調の原理は守られていると仮定する。そして会話の格率違反を犯したことに對して、ある内容を補うことにより辻褃が合うような内容を推論するのである。そのような内容が見つかったとき、それが会話の含みの内容となる。

けれども、含みを持つ表現が必ず格率違反を犯しているとは限らない。グライスは会話の格率に違反していない、または格率違反が明確でない含みの例も挙げている。それが例えば先にあげたガソリンスタンドの会話である。ガソリンスタンドの例では、Aの「ガソリンを切らしてしまった」という発話に對して、Bが「すぐそこにガソリンスタンドがある」と答えている。このBの発話についてAが含みを割り出す、ということになる。

含みの割り出しには、含みに気づくことと、含みを割り出すことの二つの段階がある。グライスの説明に準じ、段階を分けて説明すると次のようになる。

#### <含みに気づくこと>

- ①Aの「ガソリンを切らしてしまった」という発話に對するBの答えは「すぐそこにガソリンスタンドがある」と言っているだけである。これは関係の格率に反している。(グライス自身が格率違反の明確でない例に挙げ、「そこでガソリンを入れられるだろう」という含みがないのなら、関係の格率に反している、と説明している。)

#### <含みを割り出すこと>

- ②仮定：Bは協調の原理を遵守しているはずだ。(または守らない理由はない)
- ③②からの更なる仮定：BはAにとって必要な情報を提供しているはずだ。
- ④すぐそこにガソリンスタンドがあり、そこで、ガソリンを入れられるだろう。とBは思っているのだ。そしてこれがこの会話においてBが含みとしていることである。

この例のように、全ての含みが明確な格率違反を伴うわけではない。グライスは明確な格率

違反を伴わない事例も含め、含みのある表現を、格率違反をするパターンをもとにした三つのグループに分けて紹介している。

グループA: 格率が破られていない,又は格率が破られていることが明白ではない例

例えば先に挙げたガソリンスタンドの例である。「すぐそこにガソリンスタンドがある」という言葉が文字通り、ガソリンスタンドの場所を述べているだけならば、それは「ガソリンを切らしてしまった」という言葉への応答としては何か不十分な感じを起こさせる。何か不十分な感じ、というのは明確な格率違反ではないからだ。Bの発話の慣習的意味だけを考慮するならば、関係の格率に反していると言うこともできるけれども、ガソリンに関係あることではあるので、まったく関係がないわけでもない。むしろ、ガソリンスタンドがそこにある、というだけでは、情報量が不足しており、量の格率に反するのではないかという考え方もできる。ここに、そのガソリンスタンドは営業中で、たぶんそこでガソリンを入れられるという、含みを補うと十分「ガソリンを切らしてしまった」の言葉に答えるものとなる。(Grice p32, 46-47頁)

グループB: ある格率が破られており,それは他の格率との衝突によって説明できる例

例えば

2. A: Cはどこに住んでいるんだ。(Where does C live?)

B: 南フランスのどこかだ。(Somewhere in the south of France.)

の例である。Bの答えは、情報量が少なすぎて量の格率に反するが、Bは、Cの居所について南フランスという以上に詳しい情報を知らない。それなのに、うそをついてそれ以上詳しいことを言えば、質の格率を破ることになる。質の格率との衝突を避けるために、量の格率を破っているのである。(Grice p32-33, 47-48頁)

グループC: 格率の利用を伴う例

3つのグループの中で、内容が最も豊かである。話し手が含みを伝えるために戦略的に格率違反を犯す例である。グライスは次のような例を挙げている。<sup>10</sup>Aが哲学の教官職に応募する自

---

<sup>10</sup> Grice 1991 p33,48 頁を参照。

分の学生についての推薦状を書いているのだが、その文面は「前略。X君は日本語に堪能であり、また、個別指導にはいつも出席しております。草々。等々。」となっている。情報量を敢えて少なくし、量の格率を破ることによって、AがXのことを哲学的に有能でないと考えていることを含みとするという例である。グループCに入るのは、話し手が、発話の含みのほうを聞き手に伝えたいと思っている場合であることが多い。後ほど考察する隠喩的意味はこのグループに入っている。皮肉も同様である。(Grice p33-37, 48-54頁)

以上が、会話の含みと、協調の原理、会話の格率とそれらを用いた会話の含みの割り出しについての概観である。

グライスの含みの理論について次のようなことがいえるだろう。

第一に、含みは聞き手が把握するものである。話し手が発話した文から含みを割り出す主体は聞き手である。グライスは、話し手が「含みとしたこと」に、聞き手がたどり着く方法を含みの理論によって示したのである。そのために協調の原理、会話の格率という装置を用いた。では、含みにとって話し手は不在であるかというそうではない。含みの伝達という観点からすると、話し手は含みの発信者である。グライスが示したのは含みの受信のメカニズムである。そのメカニズムというのは、話し手が協調の原理を守っているということを想定して含みとなる内容を割り出す、というものだ。通常は、協調の原理が守られているならば、それを具体化したものである会話の格率も守られている。

会話の含みの割り出しは協調の原理が守られているという想定から出発するのだから、協調の原理が守られている状況の中で聞き手は会話の含みを割り出すわけである。だが実際の場面では、グライスが例を挙げたようにうまく一つの結論を割り出すことができるとは限らない。むしろ含みの候補の選択肢が複数存在することもある。場合によってはその選択肢がかなりの数になり、確定できないということもあるかもしれない。この点にはグライスも気づいていた。グライスは「論理と会話」の最後の部分で会話の含みの持つ特徴を五点にまとめて説明しているが、その中で五点目の特徴として次のように述べている。<sup>11</sup>

5、会話の含みを割り出すことは、協調の原理が遵守されているという想定を維持するために想定されなければならない事柄を割り出すことにほかならないが、その委細について

---

<sup>11</sup> Grice 1991 p39,57-58 頁

の説明は枚挙しきれないほどに多様でありうる。そのような事例では、会話の含みの内容は、そうした詳しい説明の選言の形になるだろう。そして、詳しい説明のリストが完結しなければ含みの内容は不確定だということになるが、その種の不確定性はまさに現実の多くの含みの内容が事実持っているものだと思われる。

さらに、含みの中には協調の原理の遵守を想定しないという例もある。これまで、含みの割り出しは、協調の原理が守られているという想定から出発するということを述べてきたが、協調の原理を必要としない例もある。次に挙げるのは、デイヴィスの『Implicature』に出てくる例である。

12

(2)カレン: あなた昨日の夜ジェニファーと一緒にいたの。(KAREN: Were you with Jennifer last night?)

ジョージ: 俺は外で仲間と飲んでたよ。(GEORGE: I was out drinking with the guys.)

(2)では、ジョージは前の日の夜にジェニファーと一緒にいなかったことを含みとしている。もしカレンがジョージとジェニファーと一緒にいるところを見ており、うそをついてると知っているとしても、ジョージはこのことを含みとしたかもしれない。

(3)スミス夫人: (非難するように) チョコレートを全部食べたの? (MRS.SMITH(accusingly): Did you eat all the chocolates?)

ビリー: (身構えて) 何個かはね。(BILLY(defensively): I ate some.)

(3)では、ビリーはチョコレートを全部食べたのではないことを含みとしている。ビリーがチョコレートを全部食べてしまったことをスミス夫人がよく知っていて、母親をだまそうとしたことでビリーを罰するとしてもそう言っただろう。

これらの場合、聞き手は話し手が含みとしていることを割り出すのに、協調の原理を必要としない、ということがポイントである。(2)のジョージの答えは関連性の格率を破っている。本当はジェニファーと一緒にいたので、答えをずらしているのである。そこから、

---

<sup>12</sup> Davis 1998 p116 番号は原著のまま。

- ①ジョージがジェニファーと一緒にいなかったということを含みとしようとしていること。
- ②しかし、ジョージは昨夜ジェニファーと一緒にいたのであり、ジェニファーと一緒にいたかどうかには直接答えないのだということ。

というこの二つのことが、同時に聞き手であるカレンに知られてしまうのである。(3)も同様である。(3)の場合は一見会話の格率が守られているので、ビリーがチョコレートを食べたという事実をスミス夫人が知らなければ、うそはばれないかも知れない。だが、ビリーがチョコレートを全部食べたという事実をスミス夫人が知っているならば、

- ①チョコレートを全部は食べなかったということ、ビリーが含みとしようとしていること。
- ②しかし、ビリーはチョコレートを全部食べてしまったのであり、それを隠そうとしているのだということ。

の両方がスミス夫人に知られてしまうのである。

このように話し手がうそをつき、聞き手がそのうそを見破ることができる場合には、

ア、協調の原理の遵守を仮定せずに会話の格率違反から直接含みが割り出される。(通常は格率違反を契機とし、協調の原理が守られていることを仮定して含みが割り出される。)

イ、話し手が含みとしたことを割り出しはするが、それが聞き手の信念にはならない。

ウ、聞き手は話し手が含みとしようとしたこと(聞き手に信じさせようとしたこと)とは別に話し手の事実を隠そうとする意図を読み取る。

のであり、イとウからすると、話し手が含みとしようとしたことは聞き手の信念とならず、それとは別のことが聞き手の信念となっている。このため、話し手と聞き手の間に伝達が成り立っているとは言えない。

含みの理論の特徴について注目しておきたいことがある。それは、協調の原理を必要とするにせよ、しないにせよ、上記で紹介した例外も含め、含みのある表現には、話し手の意図が働いている、という点である。それゆえ、含みの割り出しには話し手の意図を読み取ることが含まれるということである。グライスには含みと非自然的意味とを一緒に論じてはいない。しかし、話し手の意図が働くという点で、実は含みと非自然的意味とには接点があると言っていい。

## 1-2 グライスの意味の理論

次に、グライスの意味の理論について概観する。グライスの意味論は「意味」論文で論じられている「非自然的意味」(non-natural meaning)の理論である。

グライスには意味には自然的意味(natural meaning)と非自然的意味(nonnatural meaning)があるという。

自然的意味とは、例えばハシカの発疹である。グライスは次のような例を挙げている。<sup>13</sup>

3. 「あの発疹はハシカを意味している(いた)」。

4. 「あの発疹は、私には何の意味もなかったが、医者にはハシカを意味していた」。

ハシカの発疹の意味は「ハシカにかかっている」ということである。ハシカにかかっている患者が医者に見せたとしよう。医者には患者がハシカにかかっているということが発疹を見ただけでわかってしまう。患者が医者に対して自分はハシカにかかっているということを伝える意志があろうとなかろうと、医者には発疹の持つ意味が伝わってしまうのである。つまり、意味したものに意味を伝えようという意図があろうとなかろうと自然にその意味が伝わってしまう場合、それは自然的意味なのである。

自然的な意味に対し、非自然的意味は次のように説明される。<sup>14</sup>

5. 「あんなふうには(バスの)ベルを三回鳴らすのは、バスが満員だという意味だ」。

これは「(バスの)三回のベルはバスが満員であることを意味する」と言い換えてもよい。この場合は、自然的意味と異なり、三回のベル(クラクション)を聞いただけでは「バスが満員である」という意味は伝わらない。この場合には、

①ベル(クラクション)を聞いた人が三回ベルを鳴らす意味を知っていること。

②バスの運転手、またはベルを鳴らす人が満員であることを知らせるためにベルを鳴らしていること。

---

<sup>13</sup> Grice 1991 p213, 223 頁

<sup>14</sup> Grice 1991 p214, 224 頁

などの条件が必要である。非自然的意味は自然的意味と違って、自然に伝わるものではなく、それが伝達されるためには一定の条件が必要であり、その条件が揃ったときにその意味するところが聞き手(受け手)に伝わるのである。それはどのような条件なのだろうか。「意味」論文の中で、グライス是非自然的に何かを意味するための条件として、話し手の意図を設定した。<sup>15</sup>

AがXによって何事かを意味するために必要な事柄は、たぶん次のように要約できるだろう。AはXによって受け手にある信念を抱かせようと意図していなければならず、また、自分の発話がそのような意図を伴うものとして認識されることを意図していなければならない。しかしこれらの意図は相互に独立ではない。つまりAは、[受け手による第一の意図の]認識が問題の信念を生じさせるのに貢献することを意図しているのであり、それが果たされなければAの意図の実現に何らかの支障を来すことになる。

ここに述べられている非自然的意味を成立させる話し手の意図は三つある。

その第一の意図は、

①話し手が聞き手にある信念を抱かせようとする意図

である。これは今のバスの例で言えば、「バスが満員である」という信念を抱かせようとする意図である。

第二の意図は、

② ①の意図を聞き手に認識させようという意図

である。第一の意図に倣ってバスの例で言えば、「バスが満員である」という信念を抱かせようとしている、ということを聞き手に認識させようという意図である。

そして第三の意図は、

---

<sup>15</sup> Grice 1989 p219, 233 頁

③ 聞き手による第一の意図の認識(第二の意図)が、ある信念を抱かせること(第一の意図の達成)に貢献することを意図する、

というものである。即ち第二の意図の達成が第一の意図の達成につながることを話し手が意図する、というのである。これもバスの例で言えば、聞き手による「バスが満員であるという信念を抱かせようとしているのだな」という認識が、「バスが満員なのだ」という信念を生み出すことにつながることを話し手(この場合はバスの運転手)が意図する、ということになる。この三つの意図を話し手が持っていたとき、非自然的に意味したとすることができるのである。

さらに、グライスの考えでは、言語の意味は非自然的な意味である。であるから、言語の意味を考えるとときには必ず上記の意図を話し手が持っていなければならないということになる。

「意味」論文の中でグライスは、言語以外の意味現象を例として、自然的意味と非自然的意味を区別するのであるが、「発話者の意味と意図」その他の論文では、考察の対象は言語的意味となり、専ら非自然的意味の方を論じていくことになる。非自然的意味である言語の意味特定の仕方はさらに次の四つに分類される。<sup>16</sup>

- (1)「x(発話タイプ)は『…』という意味だ」(完全もしくは不完全な発話タイプに関する無時間的意味の特定)
- (2)「x(発話タイプ)はここでは『…』という意味だ」(完全もしくは不完全な発話タイプに関する適用された無時間的意味の特定)
- (3)「Uがx(発話タイプ)によって意味したのは『…』ということだ」(発話タイプの場面意味の特定)
- (4)「Uはxを発話することで…ということの意味した」(発話者の場面意味の特定)

「完全な発話タイプ」とは、文やそれに準ずる非言語的な発話タイプ(例えば手信号など)である。また、「不完全な発話タイプ」とは文ではない、単語やフレーズなどの意味、また、単語やフレーズなどに似た非言語的な発話タイプのことである。

(1)(2)から、文や語・フレーズの無時間的意味(timeless meaning)が特定される。グライスは次のように説明している。<sup>17</sup>

---

<sup>16</sup> Grice 1991 p90-91, 137 頁

<sup>17</sup> Grice 1991 p88-90, 133-137 頁

6. 「もしも私がそのときには草の生育を助けているとするならば、私にはもう読書の時間はないだろう(If I shall then be helping the grass to grow, I shall have no time for reading.).

という文を例にとると、この文の一つの意味として

(1)a 「もしも私がそのときには芝生のもとになるものを栽培しているとするならば、私にはもう読書の時間はないだろう(If I shall then be assisting the kind of which lawns are composed to mature, I shall have no time for reading.)」

ということができる。また、この文のもう一つの意味として、

(1)b 「もしも私がそのときにはマリファナを栽培しているとするならば、私にはもう読書の時間はないだろう(If I shall then be assisting the marijuana to mature, I shall have no time for reading.)」

ということもできる。このようにして特定された意味を完全な発話タイプ(文や文に類する非言語的な発話タイプ)の無時間的意味と呼ぶ。不完全な発話タイプの無時間的意味についてもこれに準じて考えることができる。例えば例文の中に出てきた「草(grass)」という語の意味を「芝生の素材(lawn-material)」と言ってもよいし、「マリファナ(marijuana)」と言ってもよい。これらが不完全な発話タイプの無時間的意味の例である。

さらに、今見たように、発話タイプには複数の無時間的意味が考えられることがある。そこで、ある発話者の特定の発話には、この複数の無時間的意味のうち、一つの意味を結びつけることができる必要がある。これが適用された無時間的意味(applied timeless meaning)の特定である。今の例で言うと、この文は

(2)a 「もしも私がそのときには芝生のもとになるものを栽培しているとするならば、私にはもう読書の時間はないだろう」

という意味だ、または、

(2)b 「もしも私がそのときにはマリファナを栽培しているとするならば、私にはもう読書の時間はないだろう」

という意味だ、ということである。これが適用された無時間的意味の例である。不完全な発話タイプについても、同様である。

一方、(3)(4)から特定されるのは、特定の場面における意味である。これも同じ文で考えてみよう。

「もしも私がそのときには草の生育を助けているとするならば、私にはもう読書の時間はないだろう(If I shall then be helping the grass to grow, I shall have no time for reading.)」

特定の発話者がこの文を発話したときに、発話者がその文によって意味した事柄は次のようなことだと言える場合もある。

(3)a 「もしも私がそのときには死んでいるならば、世の中で何が起きているか私にはわからないだろう(If I am then dead, I shall not know what is going on in the world.)」

場合によっては、特定の発話者がこの文によって意味した事柄は、次のようなものだと考えられることもある。

(3)b 「死んでしまっていることの一つの効用は、この世の恐ろしさから身を守れることだろう(One advantage of being dead will be that I shall be protected from horrors of the world.)」

このような意味の特定を、グライスは発話タイプの場面意味(utterance-type occasion meaning)の特定と呼ぶ。

さらに、発話者がこの文を発話することによって意味した事柄を次のように言うこともできる。

(4)a (この文を発話することで)発話者が意味していたのは、もしも自分がそのときに死んでいるならばこの世で何が起ころうとも自分にはわからないだろうということである。また、次のように言うこともできる。

(4)b (この文を発話することで)発話者が意味していたのは、死ぬことの一つの効用がこの世の恐ろしさから身を守れる点にあるということである。

このような意味の特定を発話者の場面意味(utterer's occasion meaning)の特定と呼ぶ。

ここまで見てきたように、グライスは(1)によって特定されるような意味を「無時間的意味」(timeless meaning)と呼び、(2)によって特定されるような意味を「適用された無時間的意味」(applied timeless meaning)と呼ぶ。これらの無時間的意味を説明するものとして、グライスは場面意味(occasion-meaning)というものを考える。そして、場面意味の概念を使って無時間的意味を説明でき、場面意味は話し手の意図に基づいて説明できるというのがグライスの意味に関する根本的な考えである。<sup>18</sup>

発話者の場面意味という概念が何らかの仕方で発話者の意図に基づいて説明可能だという仮定から出発して、次のようなテーゼを擁護する。すなわち、無時間的意味と適用された無時間的意味は、どちらも発話者の場面意味(と他の諸概念)に基づいて説明可能であり、だから究極的には発話者の意図に基づいて説明可能だというテーゼである。

このような発話者の場面意味を中心とするグライスの意味理論の全体的なプログラムは、「発話者の意味・文の意味・語の意味」の中に示されている。この論文によればグライスの意味理論の全体プログラムは次に示す六つの段階から構成される。<sup>19</sup>

第一段階では、場面意味(occasional meaning)と発話タイプの意味を分ける。

第二段階では、場面意味に定義を与える。

第三段階では、発話タイプの慣習的意味(conventional meaning)という概念を解明する。

第四段階では、発話タイプの適用された無時間的意味の解明をする。

第五段階では、「発話者がある発話によって慣習的に意味した事柄」が同時に「発話者が言ったこと」の一部にもなるための条件を特定する。

第六段階では、「ある言明の慣習的意味」の内に含まれていながら「言われた事柄」の内には

---

<sup>18</sup> Grice 1991 p91,

<sup>19</sup> Grice 1991 p118-122, 180-187 頁

含まれていないような要素について説明を補う。

以上がグライスの意味の理論の概要である。

先にも述べたように、グライスの意味の理論の特徴は、発話の意味を考える際に、その無時間的な意味よりも発話者の意図を重視すると言う点、発話の意味を、発話者が何を言おうとしたのかその意図によって説明し、場面意味として特定するという点にある。しかし、本節で見た話し手の意図の条件によって意図された場面意味と、無時間的な意味はいつも一致するとは限らない。場面意味と無時間的な意味とが一致しなかった場合には、話し手の意図する場面意味と前節で概観した含みとが関わってくることになるのである。

## 第2章 含みの理論と意味の理論

### 2-1 グライス言語哲学の全体像

第1章で説明した意味と含みの二つの理論を合わせたものがグライスの言語哲学の全体ということになる。しかし、意味の理論と含みの理論はグライスの論文では同時に取り上げられることはなく、また、意味と含みの関係について論じた論文もない。ただ一つ、グライスの言語哲学の全体像を考えようとするときにヒントとなるのは、「続・論理と会話」の冒頭部分である。ここでグライスは発話の意味作用全体(the total signification)について説明している。<sup>20</sup>

私が暫定的に採用した考え方では、多くの発話の場合に、発話の意味作用の全体は二つの異なる仕方で分割可能だと見ることができる。第一に、意味作用全体の中で、言われた事柄(私の好む意味での)と、含みとされた事柄を区別することができる。また第二に、発話の慣習的な力(あるいは意味)の一部をなすものと、そうでないものとを区別することができる。これらの区別を踏まえれば三つの要素が考えられることになる。それは言われた事柄、慣習的に含みとされた事柄、非慣習的に含みとされた事柄である。ただし場合によってはこれらの要素のひとつ又は複数のものが欠けていることもある。例えば、話し手が表向き何かを行っているように装っていながら、何事も言われていないという場合もあるだろう。さらに、非慣習的に含みとされた事柄は、会話の含みとされている場合もあればそうでない場合もある。

これをもとにすると、グライスの考えている発話の意味作用の全体、即ち意味、含みの種類とその関係は次のようにまとめられる。

---

<sup>20</sup> Grice 1991 p41,61 頁 グライスの『論理と会話(Studies in The Way of Words)』からの引用については、pで原書のページを、頁で邦訳のページを示す。

表

	慣習的	非慣習的
言った	言われた事柄	
含みとした	慣習的に含みとされた事柄	会話の含み及び その他の非慣習的含み

表では、意味作用の全体が、一方では慣習的なものと、非慣習的なものに分かれ、他方では「言った」と、「含みとした」に分かれている。2つずつの項目をそれぞれ縦軸、横軸にとると、4つの意味作用が発生しそうに見えるが、「非慣習的」に「言った」ことはないといみなされる。グライスの言語哲学におけるこれら意味作用について例を挙げながら説明していく。

例えば、AとBがAの部屋で会話しているとしよう。外は寒く、Aの部屋にストーブはあるが、ついていない。Bは寒くてストーブをつけたいと思っているのだが、この部屋の主ではないので、勝手にストーブをつけるわけにはいかない、という状況を考えてみる。ここでBが突然、

7. B:「この部屋は寒いね。風邪を引いてしまいそうだ」

と言う。

グライスの考えに従うと、この発話からは次の3つの意味作用が読み取れる。

- ①「ストーブをつけてほしい。」
- ②「発話者は風邪をひきそうな状態であるが、風邪をひいてはいない」
- ③「今発話者Bのいる部屋は寒い。発話者は風邪を引いてしまいそうな状態である」

③の意味作用はわかりやすい。なぜなら、③は私たちが発話を聞いたときにその文から直接受け取ることのできる慣習的意味だからである。②も日本語を話す人ならば、文から解る意味作用である。では①は第一章で見た「会話の含み (conversational implicature)」である。

この「含みとした」ことは既に見たように、文の慣習的な意味に加えて発話された状況やなぜこのような言い方をしたのか、などを加味して判断される。「言った」ことが言葉の持つ慣習的意味から直接決定され、文脈独立的であるのに対し、「含みとした」ことは文脈依存的である、と言っていい。

先ほどの例でも、②、③のような文の慣習的な意味作用がある。これらに加えて、Bが先の発話をした部屋がAの部屋であり、ストーブはあるのだが火をつけていない、などの状況を考え合わせるとここでBが「含みとした」のは、

「ストーブをつけて欲しい」

ということになる。これは、発話の慣習の意味とは違うが、発話とその状況から読み取ることができ、しかも発話が示唆している事柄である。グライスの理論では、このような「含み」は、協調の原理と会話の格率を用い、推論的な過程を経て導き出されることになっていた。

さらに、「含みとした」ことには、慣習的に「含みとした」こともある。ここで言う慣習的な含みとは例えば②のようなものである。この例の中では、「風邪をひいてしまいそうだ」の「～してしまいそう」という言葉に慣習的含みがある。この文字通りの意味は「風邪をひいてしまいそうな状態である」ということであるが、日本語を解する者ならば、ここからさらに

「発話者は風邪をひきそうな状態であるが、風邪をひいてはいない」

ということがわかる。このように、その文の中心的な意味ではないのだが、慣習的にその言葉や言い回しに含まれている意味的要素をグライスは「慣習的な含み」と名づけたのである。日本語での他の例を挙げると、「～も」という言葉に付随する、「他にもある」という意味的要素も慣習的な含みである。この慣習的な含みは慣習の意味に基づくものではあるが、慣習的に「言った」ことには入らない。

そこで、慣習的に「言った」ことというのは、グライスの言う意味作用の全体から、①の非慣習的に「含みとしたこと」(この例の場合は特殊な会話の含み)と、②の慣習的な含みを除いた残り、即ち③である。

先の③でBが慣習的に「言った」ことは、

「今発話者Bのいる部屋は寒い。発話者は風邪を引いてしまいそうな状態である」

である。「言った」ことというのは、文の慣習の意味から、先ほど紹介した慣習的含みを除いたものである。グライスの場合、このような文の慣習の意味は無時間的意味と呼ばれることもある。

意味の理論のところで見たとおり、無時間的意味は表現の意味である。これに対し、慣習的意味は話し手が、慣習的に意味するということになる。グライスはその独特の「言った」ことについて、次のように説明している。<sup>21</sup>なお、引用の中でS1とあるのは、次の文である。

S1 ビルは哲学者であり、だから彼は勇敢である。

Bill is a philosopher and he is, therefore, brave.

ところで、私の好むいみで「言う」を使うときには、S1の発話者は、ビルが哲学者でありしかもビルに勇気があることは言ったことになるが、ビルに勇気があることがビルが哲学者であることからの帰結であると言ったことにはならないものと考えたい。「だから (therefore)」の意味論的機能は、一定の帰結関係が成り立つことを話し手がほのめかすことを可能にする点にあるのであって、それを言うことを可能にする点にあるのではない、と私は主張したい。しかるべき変更を加えた上で、私は「しかし (but)」や「そのうえ (moreover)」についても同様の立場を取りたい。私が「言う」のこの特定のいみを採用する何よりの理由は、それが「言う」の何か他のいみよりも理論的に大きな効用を持つという私の予想にある。それゆえ、以下において私は次のような見解に加担することになる。すなわち、適用された無時間的意味と場面意味とが場合によって一致していながら(つまり、(1)UがXを発話したときに、Xの意味のうちに「\*P」ということが含まれていたということと、(2)Xを発話したときにUが意味したことの一部分が \*Pということだということが、両方ともに真でありながら)、なおかつ、Uが言った事柄のうちに \*Pと言うことが含まれるというのが偽である、ということがありうるとする見解である。私が「……ということ慣習的に意味する」という表現に関して望んでいる用語法では、右に述べた二つの条件が充たされることは、「Uは \*Pと言った」が真であるためには不十分であっても、「Uは \*Pということ慣習的に意味した」が真であるためには十分(かつ必要)なのである。

ここでグライスも述べているように、グライスの好むいみで言う「言った」ことになるためには、少なくとも、慣習的に意味していなければならない。そして、話し手が慣習的に意味するためには(適用された)無時間的意味が場面意味と一致することが、十分かつ必要なのである。この中で

---

<sup>21</sup> Grice 1991 p121,185-186 頁

\*Pの\*は、叙法標識の代用記号である。<sup>22</sup>上記の「Uは\*Pということを慣習的に意味した」を例にとって考えてみよう。話し手が、Jonesであるとする、「Uは\*Pということを慣習的に意味した」は、「Jones meant that \*P」となる。さらに、Pは「Smith will go home(スミスは家に帰るだろう)」であるとしてみる。すると次の文が得られる。

Jones meant that \* Smith will go home.( \* スミスは家に帰るだろうということをジョーンズは意味した。)

さらに、ジョーンズがこれを命令として意味したとする。命令形はthat節の中では使えないが、命令法に合わせ適切な叙法標識を用いて書き替える。そこで、Pの「Smith will go home」に叙法標識を使って変形を加え、

\* P「Smith is to go home」

とする。そして、「Jones meant that \*P」から

「Jones meant that Smith is to go home」

という文が得られる。このように、\*は「U meant that」の形に書き直す場合に、Pを適切な形に書き替えるための叙法標識の代用記号である。今は、命令法を例にとったが、\*は特定の叙法標識ではないので命令法の場合もあれば、直説法や主張などを表す叙法標識を代用する場合もある。

以上がグライスの「続・論理と会話(Further Notes on Logic and Conversation)」の冒頭にある「意味作用の全体(the total signification)」の概要である。グライス言語哲学の全体像を考えると、「含み」の理論と「意味」の理論があることは既に述べた。含みについてはこの発話の意味作用の全体(the total signification)の中に位置づけられている。表の下段がそうである。発話者によって「言われた事柄」でないものは、含みであり、その含みは慣習的含みと非慣習的含みに分かれる。さらに非慣習的含みは会話の含みとそうでないものに分かれるのである。先ほど

---

<sup>22</sup> Grice 1991 p118-119,181-182 頁を参照のこと。

確認したように、場面意味と適用された無時間的意味が一致していることは慣習的に意味することの必要十分条件である。であるから、慣習的に意味される事柄は場面意味と無時間的意味が一致している場合に相当する。このことから、慣習的意味は場面意味でもあるということがわかる。では、非慣習的に含みとされたことは場面意味となりうるのだろうか？

## 2-2 発話作用の全体と場面意味

先に述べたようにグライス自身は含みと意味を同時に論じてはいないし、両者の関係をはっきりと示していないのだが、意味と含みは別のものである、と考えていたように見える。たとえば、グライスは「直説法条件文」の中で、含みは意味とは別であるという立場で議論をしている。この論文の中でグライスは論理式の記号の意味とその意味を表す自然言語の意味には違いがない、ということを論じている。その際に両者の意味は同じなのだが、違うように見えるのは含みのせいである、という議論を展開している。このようなことからみると、グライスが含みは意味ではないという考え方をしているように見えるであろう。

そうすると、いわゆる隠喩的意味は、グライス理論でいう意味ではないということになる。後に見るように隠喩的意味は会話の含みであるから、含みは意味ではないとすると、隠喩的意味は意味ではないということになる。しかし、隠喩的意味の場合、日常の経験から、慣習的意味よりも隠喩的意味のほうが意味として受け手に認識されているように思われる。だから、意味と含みが別物であると考えてしまうと、グライスの隠喩的意味についての説明はうまくいっていないように思われる。

皮肉についても、隠喩的意味と同様である。意味は含みではなく、含みは意味ではないと考えるとうまく説明できないところが出てくる。

皮肉は「論理と会話」の中に含みの例として登場する。<sup>23</sup>

**皮肉。**これまでAと親しく付き合ってきたXが、Aの秘密を商売敵に漏らした。Aとその聞き手はどちらもそのことを知っている。Aは「Xはいい友達だ」と言う。(注釈:Aとその聞き手には、Aの言った事柄、または表向き言った事柄が、Aの信じていない事柄であることは完全に明白であり、しかもそれが聞き手にとって明白であることをAが知っていることを

---

<sup>23</sup> Grice 1991 p34,49-50 頁

聞き手は知っている。だから、Aの発話がまったくの無意味ではないとすれば、Aは自分が表向き指示しているのとは別の何らかの命題を理解させようとしているのでなければならない。それは[提示された命題と]何か明白な関連を持つ命題でなければならない。そして、もっとも明白な関連を持った命題は、彼が表向き提示している命題と矛盾関係にある命題である。)

このように含みの例として紹介された皮肉は、その一方で「発話者の意味・文の意味・語の意味」の中で、意味としても登場している。<sup>24</sup>

特定のトークンxに関して、X(タイプ)の適用された無時間的意味を、Uによるxの発話の場面意味と、混同しない注意が必要である。次の二つは同等ではない。

(i)「Uが発話した文『パーマーがニクラウスを打ちのめした』は『パーマーがニクラウスに楽勝した』という意味だった(たとえば『パーマーがニクラウスに激しい肉体的懲罰を加えた』という意味ではなく)」。

(ii)「『パーマーがニクラウスを打ちのめした』を発話したとき、Uはパーマーがニクラウスに楽勝したことを意味していた」。

Uは皮肉を言っていたのかもしれない。その場合にはUが意味したのはたぶんニクラウスがパーマーに楽勝したということだろう。だがそうすると(ii)は明らかに偽である。だが(i)は依然として真だろう。

ここでいう適用された無時間的意味とは、発話タイプが2つ以上の無時間的意味を持つときに登場する概念である。発話タイプが持っている複数の無時間的意味のうち、その発話に「適用された」無時間的意味のことである。グライスは、(i)をこの適用された時間的意味、(ii)を場面意味として区別している。そして、もし、Uが皮肉として『パーマーがニクラウスを打ちのめした』という発話をしたのなら、(ii)は偽である、と言っている。これは、Uが皮肉として発話した場合の場面意味は『ニクラウスがパーマーに楽勝した』ということだと読み取れる。つまり、含みであるはずの皮肉が場面意味でもありと取れる。

このことを、「場面意味」と「言った」こと、「含みとした」ことの関係として考えてみよう。皮肉は

---

<sup>24</sup> Grice 1991 p119-120,183 頁

会話の含みであるから、非慣習的に「含みとした」ことに当たる。皮肉が場面意味でもあるということは、非慣習的に「含みとした」ことも場面意味である場合があると考えられる。一方表の中で慣習的に「言った」と、慣習的に「含みとした」ことは、慣習的意味作用に含まれる。先ほど確認したようにグライスの意味の理論においては、場面意味が発話された文の無時間的意味と一致した場合には、発話者がその場面意味を慣習的に意味したことになる。であるから、慣習的意味作用も場面意味でありうると考えられるのである。グライスが挙げている次のような例を見てみよう。<sup>25</sup>

「ビルは哲学者であり、だから彼は勇敢である。」(S1)という文を考えてみよう。私見によれば、S1の無時間的な意味の一部は次のように言うことで適切な仕方で特定されるだろう。「S1の一つの意味の一部は『ビルは哲学研究の職に就いている』ということだ」。それどころか、次のように言えばS1の意味を完全に特定できるだろう。「S1の一つの意味のなかには、『ビルは哲学研究の職に就いている』ということと『ビルは勇敢だ』ということ、及び『ビルが勇敢であることは、ビルが哲学研究の職に就いていることからの帰結である』ということが含まれており、それ以外のことは何も含まれていない」。これを次のように言い直してもいいだろう。「S1の一つの意味は、『ビルは哲学研究の職に(…)]ということと『ビルは勇敢だ』ということ、及び『ビルが勇敢であることは(…)]ということからなっている (comprises)」。 (中略)

S1のもう一つの意味の中には(「ビルは哲学研究の職に(…)」の代わりに)「ビルは人生全般についての熟慮にふけている」ということが含まれているというのも真であるから、場合によってはUによるS1の発話に関して次のように言うことが真であることもある。すなわち、「S1のここでの意味は『ビルは哲学研究の職に(…)]ということと『ビルは勇敢である』ということ、および『ビルが勇敢であることは(…)]からの帰結である』ということからなっていた」、あるいは「S1のここでの意味のうちには『ビルが勇敢であることは(…)]からの帰結である』が含まれていた」。また、S1を発話したときにUが意味したのが(あるいは彼が意味した事柄の一部が)、ビルが勇敢であることが(…)]からの帰結だということだった、ということも真でありうるだろう。

ここでは慣習的に「言った」と、慣習的に「含みとした」ことが場面意味であるときもある、と

<sup>25</sup> Grice 1991 p120-121,184-185 頁 S1の英文は“Bill is a philosopher and he is, therefore, brave”.である。

ということが述べられている。例に挙げられているS1の文の意味作用は、『ビルは哲学研究の職に就いている』ということと『ビルは勇敢だ』ということ、及び『ビルが勇敢であることは、ビルが哲学研究の職に就いていることからの帰結である』ということである。が、この文の持つ慣習的意味はこれだけとは限らない。「哲学者であり」という言葉の慣習的意味には「人生全般についての熟慮にふけている」という意味もあるからだ。そこで、「S1のここでの意味は・・・」と言えるだけでなく、「S1を発話したときにUが意味したのが・・・」ということも言えるのであり、これは場面意味であると考えられるのである。

このことについて、ニールは‘Paul Grice and the Philosophy of Language’の中で次のように述べている。<sup>26</sup>

(1) Although there is no explicit textual evidence on this matter, it is at least arguable that a specification of the “total signification” of an utterance x made by U is for Grice the same thing as a specification of what U meant by uttering x. ((1)テキスト上の明白な証拠はないが、少なくとも次のように議論する余地がある。それは、Uがしたxという発話の意味作用全体を特定することと、Uがxを発話することによって意味したことを特定することとは、グライスにとって同じことだということである。)

ここで述べられていることからすると、「言った」ことも「含みとした」ことも、発話者の場面意味の一部であり、そのすべてを特定することによって、発話者の場面意味が特定されと考えられる。ニールは控えめにそのように議論する余地があると言っているだけだが、「言った」ことも「含みとした」ことも場面意味の一部であると考え、隠喩的意味や皮肉の説明についての前述のような問題点は解消されるだろう。

グライスの言語哲学の全体像を考えると区別しておきたいことがある。それは、「言った」こと(what is said)と「言わんとした」こと(what is meant)の区別である。言ったことというのは、第1章で紹介した慣習的に言われたことである。発話には慣習的な意味が伴う。ただし、ここで慣習的な意味とはいっても、慣習的な含みを除いた慣習的に「言った」ことをさす。例えば、ここに遠足に行きたくない子どもがいるとする。遠足の前日、その子どもは窓の外を見ながら、「明日雨が降るといいなあ。」と言っているとしよう。この場合、子どもの言いたいことは「明日遠足が中

---

<sup>26</sup> S.Neale, “Paul Grice and the Philosophy of Language” *Linguistics and Philosophy* 15 (1992) p520

止になってほしい。」ということであったとしても、「雨が降るといい」ということを言ってはいるのである。これが「言ったこと」(what is said)である。一方、「遠足が中止になってほしい」ということが、「言わんとした事柄」(what is meant)である。今の遠足の例では「言ったこと」と「言わんとしたこと」は別であったが、この二つが一致する場合もある。

先に挙げたパーマーとニクラウスの例で考えてみよう。Uが皮肉として発話した場合、( i )『パーマーがニクラウスに楽勝した』は発話者の表向き言ったこと、( ii )『ニクラウスがパーマーに楽勝した』が発話者の言わんとしたこと(what is meant)である。これは、発話者が非慣習的に含みとしたことである。また、Uが皮肉としてではなく発話した場合には、パーマーがニクラウスに楽勝したということは発話者の言ったことでもあり、言わんとしたことでもある。つまり、発話者の言わんとしたことは「言った」ことであることもあれば、(皮肉のように)非慣習的に「含みとした」ことである場合もある、ということなのである。

次章からは、この非慣習的な含みが場面意味でありうるかどうかを隠喩を題材として考察する。

## 第3章 グライス理論と隠喩的意味

### 3-1 含みとしての隠喩

含みの理論の中に、隠喩が登場する。「論理と会話」において、会話の格率の質の第一格率が無視されている例として皮肉と共に取り上げられているのがそれである。<sup>27</sup> 隠喩も皮肉も、グライス理論においては含みとして扱われているのである。確かに、隠喩も皮肉も文の無時間的意味から会話の格率と協調の原理を用いて含みとして割り出すことができるという点では、含みであると言える。だがその一方で、隠喩・皮肉の発話者が意図する内容や皮肉の意味する内容は文の無時間的意味の方ではなく、グライスの言う含みの方にある、ということが言えそうである。既に見たように、グライスの言語哲学には含みの理論のほかに意味の理論(非自然的な意味の理論)がある。隠喩的意味をグライスの意味の理論に当てはめてみると、隠喩的意味は意味であるということになるのである。

ところが、グライスは含みと非自然的意味の関係を明らかにしていない。本節では隠喩を取り上げ、含みとしての隠喩について確認する。次に挙げるのは「論理と会話」の中で、グライスが隠喩の例として挙げている文である。<sup>28</sup>

8. 「あなたは私のコーヒーの中のクリームだ。」(You are the cream in my coffee.)

あなたというのは人間であり、コーヒーのクリームというのは物である。人間がコーヒーのクリーム(という物)であるということは、事実ではない。そのような観点からするとこの発話は無時間的意味において偽であるので、質の格率「偽なることを言うてはならない」に違反する。このことから、聞き手は会話の含みとしての隠喩的意味を割り出すことができる。前節での含みの割り

---

<sup>27</sup> Grice 1991 p34,50 頁

<sup>28</sup> Grice 1991 p34,50 頁

出しに沿ってここでも含みとしての隠喩的意味を割り出してみよう。勿論、話し手は協調の原理を守っているはずであるということを想定して割り出すのである。

<含みに気づくこと>

①彼は「あなたは私のコーヒーの中のクリームだ」という文を発話した。「あなた」である私は人間であり、コーヒーの中のクリームではない。これは質の第一格率に反している。

<含みを割り出すこと>

②仮定：彼は協調の原理を遵守しているはずだ。(または守らない理由はない)。

③②からの更なる仮定：彼は何か偽でないことを意味しているはずだ。私をコーヒーの中のクリームに喩えているのだ。

④「コーヒーの中のクリームのように、あなたは私の楽しみであり、誇りなのだ」ということを彼は意味しているのだ。

そして④がこの会話において彼(話し手)が含みとしていることである。

このようにして隠喩的意味は会話の含みとして割り出すことができるというのがグライスの考えである。この例の隠喩は「AはBである」という形をとっている。隠喩の文では、この形をとるものが非常に多い。しかし、隠喩表現をしている文が全てこの形式をとるとは限らず、違う形の隠喩文も存在する。例えば、次のような隠喩文もある。<sup>29</sup>

9. その患者は峠を越した。

「峠を越した」という隠喩はすでに死喩となっている。「峠を越した」という言い回しは、既に危険な状態を過ぎたという決まった意味を持っている。従って、話し手がその都度この文の隠喩的意味を割り出す必要はない。しかしここで問題にしたいのは、「AはBである」という形式ではない隠喩である、ということなので、このまま話を進める。この隠喩の隠喩的意味をあえて割り出してみると次のようになるだろう。例えば聞き手はこの隠喩表現の決まった意味を知らないということにしよう。話し手は医者であり、聞き手である患者の家族に「患者は峠を越しました」という文を

---

<sup>29</sup> 深谷・田中 1996 p175

発話したとする。ここでグライス理論に従って会話の含みを割り出してみると次のようになる。

<含みに気づくこと>

② 医者は「患者は峠を越しました」と言っているが、患者は病院に入院しているのだから、病院から抜け出して、峠を越えることはできない。それ故この発話は無時間的意味として理解すると偽である。これは質の第一格率「偽だと思ふことを言ってはならない」に反している。

<含みを割り出すこと>

② 仮定：医者は私たち患者の家族との会話の中で、協調の原理を遵守しているはずだ。（または守らない理由はない）。

③ ②からの更なる仮定：医者は私たちにとって必要な情報を提供しているはずだ。

④ 峠とは実際に越えるのが大変なところであり、患者は大変な(危険な)状況を乗り越えました。ということを医者は意味しているのだ。

そしてこれがこの会話において医者(話し手)が含みとしていることである。

これも、基本的には質の第一格率に違反している例であり、含みの割り出し方から言うと、「AはBである」の形式の隠喩と大きな差異はない。隠喩文の場合、その会話の含みは無時間的意味が偽であることによって、質の第一格率への違反から割り出されることが多い。

ところが、隠喩の文というのは事実と違う、偽なる文ばかりとは限らない。隠喩の中には真なる文も存在する。菅野盾樹の『メタファーの記号論』に登場する二回真の文というのがそれである。<sup>30</sup> これらの隠喩文は無時間的意味も真、隠喩の意味も真になるので、無時間的意味と隠喩の意味とで二回真になる、ということである。例えば

10. 「女は女だ」

11. 「負けは負けだ」

などという文がそれである。これらは同じ言葉を繰り返しているので形式としては「AはAだ(である)」となる。これは当然真である。これらの隠喩文に格率違反はあるのだろうか？どのようにし

---

<sup>30</sup> 菅野 1985 p159-160 例文の番号は原著とは違い、この論文の例文の通し番号とした。

て私達はこのような一見当たり前のことを言っている文の隠喩的意味を割り出すのだろうか。このような事例についてグライスが量の第一格率を無視する例として説明している。<sup>31</sup>

量の第一格率が極端な形で無視される例を提供してくれるのは、「女は女だ」とか「戦争は戦争だ」といった明白な同語反復の発話である。私の考えでは、私の好む意味での《言われた事柄》のレベルでは、それらの発言が持つ情報量はゼロであり、だからそのレベルでは、これらの発言はどのような会話のコンテキストでも量の第一格率に違反せざるをえない。勿論、それらの発言は、含みとされた事柄のレベルでは一定の情報量を担っている。そして、このレベルでの情報内容を聞き手が同定できるかどうかは、話し手がなぜ特にこの明白な同語反復を選択したのかを聞き手が説明できるかどうかにかかっている。

この説明では、二回真の文も量の格率に違反しているということになり、含みの割り出しについてはこれまでにみてきた例とあまり変わらないということになる。デイヴィッドソンもまた隠喩文が字義通りに意味している内容は真であっても、偽であっても、その文の隠喩的な用法を求めるきっかけになると述べている。<sup>32</sup>

だれの目にも明らかに偽であることは隠喩にとって普通のことであるが、場合によっては、だれの目にも明らかに真であることも同様に役立つことがある。「仕事は仕事だ」というのは、その字義通りの意味では余りに自明的すぎて、情報を伝えるために発話されたとは考えられない。そこで、別の用法を求めることになるのである。

このように、隠喩文の字義通りに意味している内容が真であるような隠喩であっても、隠喩解釈のプロセスに大きな違いはないと考えられる。

菅野は『メタファーの記号論』においてこの「AはAである」という形式とは違う三つの隠喩文を二回真の文の例として挙げている。<sup>33</sup>

12. I have climbed to the top of the greasy pole.(かつて脂ですべる柱の頂上まで登ったことが

<sup>31</sup> Grice 1991 p33, 48-49 頁

<sup>32</sup> Davidson 1984 p258, 邦訳 282 頁 グライスは字義通りの意味という言葉を使わないが、グライスの慣習的意味はここでデイヴィッドソンが話題にしている字義通りの意味に対応する。

<sup>33</sup> 菅野 1985 p159 例文の番号を原著と同じではなく、この論文の例文の通し番号とした。

ありましたっけ。)

13. あの殺人犯は残忍な動物だ。

14. この絵は暗い。

12は、菅野も述べているように、発話者である英国の宰相ディズレイリが過去に脂棒の天辺に登ったという経験を実際にしたのなら真、また、さらに、政治家として脂棒の天辺に登るような経験をした、というのなら隠喩的意味としても真である。13についても、人間は動物であるので、殺人犯が残忍な動物であるというのは文字通りに真であると言ってよい。また、殺人犯の残忍さを強調して、動物を人間ではない、という意味に使うて隠喩として表現したとしても真である。また、14は、例えば絵が黒っぽい色で書かれており、色調が暗ければ文字通りに真、また、絵のテーマなどが暗い場合にそれを指して隠喩として表現したのであれば、それも真である。

先に挙げた二回真の文例は「AはAである」という形式のもので、量の格率への違反から含みの割り出しができることは既に見たとおりである。12～14のような場合には聞き手はどのようにして隠喩的意味の解釈へと進むのであろうか。まず、12については文脈上単に過去に脂ですべる棒に登ったことがあるという話を持ち出すことが不自然であるなど、単なる過去の話として解釈した場合に、質の格率以外の格率に違反していることが多いであろう。そして、格率違反から単なる過去の話としてではなく、政治家としての経験の隠喩的意味へと進むことが考えられる。そうすると、12の例はこれまでの例と同じ仕方で、会話の格率違反から隠喩的解釈へと進むことができる、と考えるのが妥当である。

では、13や14はどうであろうか。13と14の例は12に比べると難しい。何故かというと文の慣習的意味と隠喩的意味や、そのニュアンスが非常に近く、明らかな格率違反が見当たらないことが考えられるからだ。ただ、含みの理論のところでも述べたように、グライス自身含みの中には明らかな格率違反がない例も挙げている。先に紹介したグループA1にあたるものがそれだ。グライス自身が会話の含みの例においてグループAとして挙げている<sup>34</sup>、どの格率も侵害されていないか、または格率の侵害が明白でない含みがどのようにして割り出されていたかということを出して見よう。このグループAの例にあたるのは例文2で挙げた「ガソリンを切らしてしまっただ」「すぐ近くにガソリンスタンドがある」という例である。

---

<sup>34</sup> Grice 1991 p32,46-47 頁

1. A: ガソリンを切らしてしまった。(I am out of petrol.)

B: すぐそこにガソリンスタンドがある。(There is a garage round the corner.)

Bの発話した文が無時間的に意味しているのは、AとBのいる場所のすぐ近くにガソリンスタンドがあるということである。「すぐそこにガソリンスタンドがある」という言葉が文字通り、ガソリンスタンドの場所を述べているだけならば、それは「ガソリンを切らしてしまった」という言葉への応答としては何か不十分な感じを起こさせる。何か不十分な感じ、というのはこのBの答えが明確な格率違反ではないからだ。発話者が発話した文の無時間的意味だけを考慮するならば、「ガソリンを切らしてしまった」と言っているのに対してガソリンスタンドの場所を答えているだけだから、関係の格率に反していると言うこともできるけれども、ガソリンに関係あることではあるので、まったく関係がないわけでもないと考えることもできる。むしろ、ガソリンスタンドがそこにある、というだけでは、情報量が不足しており、量の格率に反するのではないかという考え方もできる。しかし、この場合Bはガソリンスタンドがあるという事実を言いたいとか、ガソリンスタンドの位置をAに伝えたいというよりも、そのガソリンスタンドが多分営業中で、そこでガソリンを入れられるということを知らせたいのである。前者はBの「言った」事柄である。後者がBが含みとしていることである。このように含みとは、一言で言えば、「言った」こととは別に、話し手が示唆したり、ほのめかしたり、示したりしているものである。ここに、そのガソリンスタンドは営業中で、たぶんそこでガソリンを入れられるという含みを補うと十分「ガソリンを切らしてしまった」の言葉に答えるものとなる。このような考え方、即ち、明白な格率違反を犯していないのだが何か不十分な感じを与える場合でも、仮定を補うことにより不十分な感じが解消されるという考え方を、慣習的に意味している内容が真である隠喩に適用することは可能であろう。例えば12の例文で、ディズレイリが実際に脂棒に上った経験がある場合には適用できると考える。

以上により、含みとしての隠喩がどのようにして含みとして認識され、聞き手はその含み(隠喩の持つ内容)をどのようにして割り出すのかを確認した。隠喩の隠喩的意味がグライスの含みの理論においては文の慣習的な意味から含みとして割り出されるものとみなされることは示されたと思う。

### 3-2 無時間的意味と話し手の意図

先にグライスの含みの理論と意味の理論とを概観した。グライスの意味の理論では、次のようになっていた。

- ①非自然的に意味した、というためには話し手の意図が必要である。
- ②発話の意味は場面意味として、話し手の意図によって説明できる。

本節及び次節では、上記①②を踏まえつつ、隠喩的意味が非自然的意味となっているかどうかについて検討する。なぜなら、隠喩的意味はその表現に使われる文の非自然的意味とは別に、グライス理論では含みとして扱われているものであるが、それにもかかわらず、隠喩的意味は非自然的に意味するための条件を満たしているように思われるからだ。

このため、この節では隠喩表現を含む文の隠喩的意味が非自然的に意味するための条件を満たしていることを示し、そこから隠喩においては隠喩的意味こそが非自然的に意味されているものであり、場面意味であることを示したいと思う。

第3章で挙げた隠喩表現の例を再び思い起こしてみよう。

#### 8. あなたは私のコーヒーの中のクリームだ。

これは「AはBである」という隠喩表現に多い形をとっている。この文の無時間的意味は「あなた(人間)は私のコーヒーの中に入れるクリームである。」というものだ。人間がクリームだということだから、これは事実としては明らかに間違っている。無時間的意味だけにこだわるならば、わけのわからない無意味なことを言っているに過ぎないと取られなくもない。

この慣習的意味を聞き手に信念として抱かせようと、話し手は意図しているのだろうか。

非自然的意味に必要な話し手の意図の条件は三つあった。この発話について、第一の意図から順に確認してみると次のようになる。

第一の意図は、何かを聞き手に信念として抱かせようとする意図である。この例の場合、第一の意図は、

①「あなた(人間)は私のコーヒーの中に入れるクリームである。」を聞き手に信念として抱かせることを意図する

というものである。けれども、話し手は「あなたはコーヒーの中に入れるクリームだ」ということを信念として抱かせたいのではないだろう。話し手が信念として抱かせようとしているのは、即ち、言いたいのはこの文の慣習的意味よりも、「あなたは私の誇りであり、楽しみだ」という隠喩的意味の方であると考えられる。従って、この文の慣習的意味は話し手が非自然的に意味するための第一の意図の条件を満たしてはいない。

次に第二の意図である。第二の意図は聞き手が話し手の第一の意図を認識することである。この場合の話し手の第二の意図は、

②「話し手が『あなた(人間)は私のコーヒーの中に入れるクリームである。』という信念を抱かせようとしている」ということを聞き手が認識することを意図する

というものであるが、そもそも第一の意図の条件において話し手が文の無時間的意味を伝えようとしているのでない以上、第二の意図は成立しない。従ってこの隠喩文の無時間的意味は第二の意図の条件も満たしてはいない。

次に第三の意図について検討してみよう。第三の意図は、

③「話し手が『あなた(人間)は私のコーヒーの中に入れるクリームである』という信念を抱かせようとしている」ということを聞き手が認識することによって、『あなた(人間)は私のコーヒーの中のクリームである』ということを聞き手が信じるようになることを意図する

というものである。第一、第二の意図の条件と同様に第三の意図の条件についても成り立たない。

第三の意図は、聞き手が話し手の第一の意図を認識すること(第二の意図)によって第一の意図が達成されるよう意図することである。その結果聞き手は何らかの信念を持ったり、行動しよ

うという意図を持ったりするのである。これらの効果については「意味」論文では直説法では「信念を生じさせる」、命令法では「行動を起こさせる」、となっていた。これに対し、「発話者の意味・文の意味・語の意味」では、直説法については「発話者が何ごとかを信じていると聞き手が思うこと」、命令法については「聞き手が何ごとかをしようとする意図すること」<sup>35</sup>と修正されている。

しかし、上記のような修正を加えたとしても、結果は変わらないであろう。話し手はそもそも「あなた」がコーヒーの中のクリームだと信じているわけでもないし、あなたが、コーヒーの中のクリームだということを自分が信じていると聞き手に思わせようとしているのでもないからだ。従って、第一の意図の条件と同じ理由により、第三の意図の条件も成り立たない。既に見たように第一の意図の条件も、第二の意図の条件も成り立っていないのであるから、第三の意図の条件は成り立たない。

では、「AはBである」という形式とは違う形式を持つ隠喩表現の文はどのようなのだろうか。3-1で挙げた「患者は峠を越しました」という隠喩文や二回真の文について改めて検討する必要はないと思われる。なぜなら、ここで問題となっているのは隠喩表現の無時間的意味が非自然的に意味するときに必要な話し手の意図の条件を満たしているかどうかということだからである。無時間的意味と隠喩的意味を対比して考えると、ほかの形式の例についても事情は同じであると考えられる。二回真の文の場合には、無時間的意味の方を意図しているのではないかということが問題になるかもしれない。しかし、二回真の文を隠喩として発話した場合には、「AはAだ」のように、言うまでもなく真であることを敢えて発話することによって隠喩的意味が求められる場合もあるであろうし、例文12～14で見たように他の何らかの理由により、隠喩的意味が求められる場合もある。そのような場合には、やはり、非自然的に意味するための意図の条件を満たしているのは、隠喩的意味のほうであると考えられる。しかし、例えば和歌で使われる掛詞のように、発話文の無時間的意味と隠喩的意味の両方を意図し、利用する場合もあるだろう。そのような例外は有り得るにしても、話し手が隠喩表現を使ったときに話し手の意図の条件を満たしているのは無時間的意味ではないと考えてよいであろう。このことから、グライスが隠喩や皮肉の説明をする場合に「表向き言ったこと(make as if to say)」という表現を用いた理由もわかる。グライスの独特の意味で「言う」ためには慣習的に意味しなければならず、慣習的に意味するためには場面意味となっていなければならないのである。場面意味は話し手の意図に基づくものであるから、隠喩の場合の無時間的意味はグライスの意味での「言ったこと」にはならないのであ

---

<sup>35</sup> Grice 1989 p123, 188-189 頁

る。グライスの独特の意味での「言う」がこのような内容であるために「表向き言ったこと」という表現が必要になるのである。

### 3-3 隠喩的意味と話し手の意図

次に無時間的意味ではなく隠喩的意味が話し手の非自然的に意味するための条件を満たしているかどうかを確認する。

先に挙げた「あなたは私のコーヒーの中のクリームだ」という隠喩が「あなたは私の誇りであり、楽しみだ」という隠喩的意味を持つとしよう。すると、「私の誇りであり、楽しみだ」というこの隠喩的意味は話し手が非自然的に意味する時の話し手の非自然的に意味するための条件を全て満たしているであろうか。

まず、第一の意図について確認しよう。この場合は隠喩的意味である「彼女は私の誇りであり、楽しみだ」という信念を抱かせようとする意図が第一の意図である。話し手は「あなたはコーヒーの中のクリームである」という無時間的意味よりも、「あなたは私の誇りであり、楽しみだ」ということを信じさせようとしているのだと思われる。従って第一の意図の条件は満たされている。

次に第二の意図は、聞き手が第一の意図を認識するように意図することである。「あなたは私の誇りであり、楽しみだ」という信念を持たせたいという第一の意図が聞き手に認識されるように意図されているのだろうか？

これを確認するには話し手が隠喩的意味を聞き手が認識するように意図していないと仮定してみるのがよいだろう。もし、話し手がこの隠喩の隠喩的意味「あなたは私の誇りであり、楽しみだ」を信じさせようとする意図を聞き手が認識することを意図しないと仮定してみる。すると、隠喩文「あなたは私のコーヒーの中のクリームだ」は聞き手にとってまったく意味が解らないか、またはその慣習的意味が伝わればよいということになる。この場合、慣習的意味も伝わらないのでは、何がなんだかかわからずに終わってしまうし、慣習的意味が伝わるだけでも不十分である。慣習的意味だけでは、聞き手にとって単なる間違えた文に終わってしまうからだ。

「あなたは私のコーヒーの中のクリームだ」と発話する時には、少なくとも話し手は聞き手がこの隠喩の隠喩的意味を解ってくれるだろうと考えているのでなければならないだろう。ただ、今の「コーヒーの中のクリーム」という例については聞き手に解りにくい場合もあるかもしれない。そのような時には隠喩的意味を聞き手に向かって説明する、ということになるかもしれない。もっとわかりやすい隠喩の例を挙げるならば、例えば、「男は狼なのよ」と言う時、「この話はあの人

には内緒よ。彼女、拡声器だから」などと言う時、話し手は聞き手がこれらの隠喩表現を理解するであろうと予想して発話している筈である。もし、そうでなければなぜこれらの隠喩を発話するのかが解らなくなる。なぜなら、この隠喩表現を用いて話し手が言おうとしていることは、まさにこの隠喩の隠喩的意味の方であるからだ。従って隠喩を発話する際に、第二の意図の条件は満たされていると考えてよい。

第三の意図は、第二の意図、即ち聞き手が話し手の第一の意図を認識することによって、第一の意図、即ち話し手が聞き手に対して意図した効果が達成されることを意図するということなのであった。第一の意図、第二の意図がそれぞれ独立して別々に意図されているのではなく、第二の意図の達成を通じて第一の意図が達成されることを話し手は第三の意図において意図するわけである。

これを隠喩の場合で考えてみると次のようになるだろう。第一の意図、第二の意図で話し手が聞き手に抱かせようとする信念が、隠喩的意味の方であることは既に確認済みである。「あなたは私のコーヒーの中のクリームだ」という時、話し手は「あなたは私の誇りであり、楽しみだ」ということ(隠喩的意味)を聞き手の信念にしたいと思っている。なおかつ、話し手は聞き手に自分が「あなたは私の誇りであり、楽しみだ」ということを言いたいのだということ(第一の意図)を認識することを意図(第二の意図)しているのである。すると第三の意図は第一の意図と第二の意図をつなぐものであるから、「あなたは私の誇りであり、楽しみだ」という信念を抱かせたいという意図を聞き手が認識することによって、「あなたは私の誇りであり、楽しみである」と聞き手が信じるという効果を意図している、ということになる。

今、第三の意図は第一の意図と、第二の意図をつなぐものであると述べたが、話し手が非自然的に意味するという場合において、第一の意図と第二の意図は独立ではない。

例えば、グライスの挙げている例に次のようなものがある。<sup>36</sup>

15. ヘロデが洗礼者聖ヨハネの首を大きな皿に載せてサロメに差し出す。

これは非言語的な意味作用だが意味するという事について考えてみると、非自然的に意味することについての第一の意図と、第二の意図の条件は満たしていると考えられる。つまり、第一の意図として、ヘロデ王はサロメに「洗礼者ヨハネは死んだ」ということを信念として抱かせようと

---

<sup>36</sup> Grice 1991 p218, 231 頁

しているのであり、第二の意図として、「洗礼者ヨハネは死んだ」ということをヘロデ王はサロメに信念として抱かせようと意図しているということをサロメに認識させようと意図している、ということも出来る。しかし、この例の場合では、ヘロデ王が上記のような意図を持ってしようと持っていないと、サロメには「洗礼者ヨハネは死んだ」ということがわかってしまうのである。なぜなら、洗礼者聖ヨハネの首を見ただけで、サロメにはヨハネが死んだということがわかってしまうからだ。ここでは、ヘロデ王の意図とは関係なく聖ヨハネの首の意味するところがサロメに伝わってしまうのである。これでは、ヘロデ王が「洗礼者聖ヨハネは死んだ」ということを非自然的に意味したということにはならない。このように、第一の意図と第二の意図の条件を満たしているにもかかわらず、話し手が非自然的に意味したといえない事例が存在する。そこで、第三の意図が必要になるのである。ヘロデ王が非自然的に意味した、というためにはヘロデ王が「洗礼者聖ヨハネは死んだ」という信念をサロメに抱かせようと意図しており、しかも、そのような(第一の)意図をサロメが認識することが必要である。

一方、ヘロデ王が聖ヨハネの首を見せたのではなく、サロメに向かって「洗礼者ヨハネは死んだ」と発話したとしてみよう。この場合、ヘロデ王の第一の意図は、

「洗礼者ヨハネは死んだ」ということをサロメに信念として抱かせること。

であり、第二の意図は

ヘロデ王が「洗礼者ヨハネは死んだ」ということを信念として抱かせようと意図していることをサロメに認識させようとする事。

である。

「洗礼者ヨハネは死んだ」というヘロデ王の発話が、第一の意図の条件だけを満たしているとしても、今度の場合は、ヨハネの首を差し出した場合と違って、第二の意図の条件が満たされないと、第一の意図が達成されないのである。第一の意図の認識(第二の意図)の達成を通して第一の意図が達成される、という第三の意図の条件があってはじめて、ヘロデ王が「洗礼者ヨハネは死んだ」を非自然的に意味した、ということになるのである。

もう一度隠喩の例に戻って考えてみよう。

## 8. あなたは、私のコーヒーの中のクリームだ。

という時、話し手は、第一の意図として「あなたは私の誇りであり、楽しみだ」という信念を聞き手に抱かせようとしている。さらに、第二の意図として「あなたは私の誇りであり、楽しみだ」という信念を聞き手に抱かせようと意図していることを聞き手に認識させようと意図している。この時、先ほどのヘロデ王の例のように、第二の意図によって、話し手は「あなたは私の誇りであり、楽しみだ」ということを言いたいのだと聞き手が認識し、第一の意図の目標である「あなたは私の誇りであり、楽しみだ」という信念を持つに至ることが必要だ。そうでなければ話し手が「あなたは私の誇りであり、楽しみだ」ということを非自然的に意味したことにならないからである。そのためにはこの第一の意図の認識と、聞き手が信念を持つに至る道筋を保障する第三の意図が必要となってくるのである。そこで第三の意図が対象としているのは隠喩的意味か、慣習的意味かという、それはここまで見てきたように隠喩的意味の方になる。

以上により、話し手が非自然的に意味する場合に必要となる三つの意図は隠喩的意味にある、ということになる。隠喩の場合、非自然的に意味されているのは隠喩表現の慣習的意味ではなく、隠喩的意味の方なのだということが、これではっきりしたと思う。

## 第4章 意味の拡張としての隠喩的意味

### 4-1 隠喩的意味についてのさらなる考察

先の節では隠喩表現において、文の慣習的意味は話し手の意図の条件を満たしておらず、反対に隠喩的意味が話し手の意図の条件を満たしていることを見た。従ってグライスの言うように、言語の意味が非自然的意味であり、なおかつ非自然的意味は話し手の意図によって説明されるとすると、隠喩的意味が隠喩表現をしている語や文の場面意味であるということになる。グライスの隠喩的意味を「含み」とする考えでは、会話の格率違反を契機として、推論によって隠喩的意味にたどり着くのだが、格率違反からどのようにして隠喩的意味にたどり着くのかは必ずしも明らかになっていなかった。これに対し、サールはグライスと違って発話文の文字通りの意味、もしくはグライスのいう無時間的意味を意図によって説明せず、その代わりに聞き手がどのようにして隠喩的意味にたどり着くかを説明した。グライスは文の無時間的意味、慣習的意味という用語を使っていたのに対し、サールはこれらの用語を用いず字義通りの意味(literal sentence meaning)という用語を用いた。ここでは、無時間的意味、慣習的意味という用語に対応する字義的意味という用語を用いることとする。また、隠喩的意味はグライスにおいては含みとされたが、サールは文の意味で直接言い表されていないが話し手が意味しようとすることについて、話し手の発話意味(speaker's utterance meaning)という用語を用いている。従って、隠喩的意味は話し手の発話意味ということになる。グライスが隠喩的意味は含みであるとしたのに対して、サールは隠喩的意味をさらに明確に意味として位置づけている。意味が文の字義通りの意味から隠喩的意味へと拡張されるのだという考え方である。

さらに、文の意味は文の字義通りの意味だけであり、隠喩的意味は意味ではない、とする考え方もある。上記の意味の拡張という考え方は、語や文の字義通りの意味が第一に言語の意味であると認めた上で、その意味概念を隠喩的意味にまで拡張した、と考えるものである。もし、文の字義通りの意味しか意味と認めないならば、隠喩や皮肉などのように文の字義通りの意味と話し手の言おうとしている意味が食い違っている場合には対応できない。隠喩的意味が意味でないとする、それらの文の字義通りの意味はたいてい偽であるから、それらは偽なる文であ

るに過ぎないということになる。また、もしそれらの文の字義通りの意味が真であっても、余りにも当たり前のことを言っているだけであつたりするので、当然過ぎて意味のない文ということになるだろう。しかし、実際に私たちが隠喩や皮肉を口にしたり、聞いたりするとき、それは単に事実と違うとか、意味がないとか、うそであるとか、そういうものではない。先にも述べたように、隠喩であれば話し手は隠喩的意味を目指して発話するし、聞き手も慣習的意味を経由して隠喩的意味へとたどり着く。隠喩表現の慣習的意味に留まらず隠喩的意味に到達して初めて、聞き手は隠喩表現の意味を理解したと感ずるのであるし、話し手はその発話の目的を遂げるのである。グライスの含みの理論はこのような文や語が直接に示す意味だけをしか意味と認めない場合にはこぼれ落ちてしまう言語の間接的な意味を、含みと言う概念によって掬うものであつたといえるであろう。菅野盾樹は『メタファーの記号論』の中でグライスの理論について次のように述べている。<sup>37</sup>

このようなグライスの理論の意義は、伝統の修辞学を他の誰よりも明示的な手続きで現代記号論に連結した点にある。協同原理、会話の作法、発話の意図、会話の含みなどが、そのためにグライスが開発した概念装置に他ならない。さらに比喩理論を含め彼の会話分析そのものが、記号論にとりある新しい意義、すなわち記号の代表主義を克服し、言語行為が陳述の意味へ寄与する観察を以って記号の本性をいっそう具体的に捉えたという意義を持っている。代表主義でのように、記号はそれが代表するものの面前で透明となり姿をかき消すわけではない。記号は言外の意味へ差向けられるかぎりにおいて自己自身を呈示する。それはいわば半透明なのだ。このように、デイヴィッドソンが意味/使用の二分法で押し通すのとは異なり、文の含意の拡張が比喩現象を救出するために行われたのである。

この章では、サールとデイヴィッドソンが論じた隠喩的意味について考察する。サールはグライスの隠喩的意味を含みとする、という考え方をさらに進めて、文の慣習的意味を字義通りの意味(literal sentence meaning)、隠喩的意味を話し手の発話意味(speaker's utterance meaning)とし、隠喩的意味を命題的な内容を持つ意味と認めるのである。このように隠喩的意味について、文の字義通りの意味から隠喩的意味へと意味を拡張するという考え方をとる立場としてサ

---

<sup>37</sup> 菅野 1985 p57

ールの「隠喩」論文を取り上げる。サールの議論を取り上げる際に、隠喩の真理値についても考察したいと思う。反対に隠喩的意味を命題的な内容を持つ意味としては認めず、字義通りの意味から隠喩的意味への拡張を認めない立場として、デイヴィドソンの「隠喩の意味するもの」を取り上げる。デイヴィドソンは後に隠喩的意味も認める立場に変わったが、字義通りの意味を重視する考え方は変わっていない。この二人の議論を通して、隠喩的意味を意味として認める文の字義通りの意味から隠喩的意味への意味拡張の可能性を探る。

#### 4-2 サールの隠喩論

サールは「隠喩」論文で隠喩について論じている。隠喩的意味について、サールはグライスの隠喩的意味を含みとして説明する考え方をさらに進めた。サールはグライスの言う無時間的意味に当たるものを字義通りの意味 (literal sentence meaning) , 隠喩的意味を話し手の発話意味 (speaker's utterance meaning) とした。そしてこの二つの意味を併記するという手法をとった。

例えば、次のようなものである。<sup>38</sup>

12. (MET) サリーは氷の塊だ。(Sally is a block of ice.)

(PAR) サリーはひどく感情の欠けた、反応の乏しい人だ。(Sally is an extremely unemotional and unresponsive person.)

ここで、(MET) 文は隠喩として発話された文であり、(PAR) 文は隠喩的意味を表す文である。また、(MET) 文は発話された文そのものであるから、その隠喩文の直接的な意味をも表す。サールはこれを「字義通りの意味」(literal sentence meaning) と呼んだ。また、(PAR) 文の方は隠喩的意味が字義的意味になるように言い換えた文であるから、(MET) 文を通して話し手が伝えたいことを表す。これをサールは「話し手の発話意味」(speaker's utterance meaning) と呼んだ<sup>39</sup>。文の意味とは、文の言葉通りの意味である。また、話し手の発話意味とは隠喩によって話し手が言い表そうとしている意味、文によって直接言い表されていないが聞き手が隠喩に気づき、隠喩的意味を獲得することによって知られるような意味のことである。隠喩的発話においては話

<sup>38</sup> Searle 1979 p82 邦訳 91 頁

<sup>39</sup> Searle 1979 P77

し手の言おうとしている隠喩的意味と、話し手の言う字義通りの意味が違っているので、その説明には二つの文が必要とされるのである。このように、サールは隠喩に隠喩的意味と字義通りの意味の二つの意味があると考えている。そして隠喩においては話し手の発話する字義通りの意味と隠喩的意味が違っていると捉えているのである。

隠喩の問題は文の意味と隠喩的意味の二つの意味の関係に関わっている。隠喩の理論を構築することは、この二つの意味を関係させる原理を述べようとすることであるとサールは言う。それは聞き手の視点では、聞き手がどのようにして話し手の意味を理解できるのか、という問題であり、話し手の視点では話し手が発話した言葉や文の字義どおりの意味と違うことをどのようにして意味することができるのかという問題だと言うのである。

サールによれば、話し手は(MET)文を発話することによって(PAR)文を意味し、伝える。これを一番単純な文の形で表すと、話し手は“S is P”という隠喩文(MET)文を発話することによって“S is R”という隠喩的意味(PAR)を伝えるのである。そこでサールは「PがそのままではRを意味していない時に、話者が『SはPである』と隠喩的に発話して『SはRである』と表意することがいかにして可能になるのか」さらに、「『SはPである』と言う発話を聞いた聞き手が、話者が『SはRである』と表意している、ということはいかにして知りうるのか」<sup>40</sup>という問いを立て、隠喩の字義通りの意味と隠喩的意味を結ぶ原則を立てていった。その原則をまとめると次のようになる。

＜話し手と聞き手が字義的発話でコミュニケーションするに十分な言語的事実的知識を共有している。話し手が「SはPである」と言いながら、「SはRである」と隠喩的に意味する発話をし、聞き手が理解するに十分かつ必要な原理＞

- ①聞き手がその発話を字義通りに意図されたものでないとわかるための土台となるいくつかの共有された戦略がなければならない。普通は、その発話を字義通りに受け取ると明らかに不完全であるという事実に基づく。
- ②Pという言葉から可能なRの価値を連想させる、いくつかの共有された原理がなければならない。
- ③聞き手がSという言葉の価値を与えられ、Rの可能な値の範囲からRの実際の値を限定するいくつかの共有された戦略がなければならない。

---

<sup>40</sup> Searle 1979 P104 邦訳 120-121 頁

このうち②の原理が隠喩論の中核であるとサールは言う。「隠喩」論文の中で提案された原理は次のようなものである。

<Pが与えられ、Rを算出するためのいくつかの原理>

原理1. Pであるものは、定義によってRである。

原理2. Pであるものは、場合によってRである。

原理3. 話し手も聞き手も、RがPについて偽であると知っているかもしれないとしても、Pであるものは、しばしばRであると言われたり、信じられたりしているものである。

原理4. PがRでなく、Rのようなものでもなく、Rであると信じられてもいないものであっても、それは文化的自然的に決まる私たちの感覚について事実である。私たちはただ、そのつながりを受け取る。Pは私たちの心の中でRと言う特徴を連想させる。

原理5. PなるものはRなるものと似ていなく、Rなるものに似ていると信じられてもいない。それでも、Pである条件は、Rである条件と似ている。

原理6. PとRの意味が同じか似ている場合がある。しかし、普通Pはその適用によって限定される。字義通りにSに適用されるのではない。

原理7. 原理1～6を関係の隠喩(relational metaphors<sup>41</sup>)やまたは、動詞や述語形容詞を含む他の構文形式に適用する方法である。聞き手は「SはPである」から「SはRである」に到達するのではなく、「SはS'とP関係にある」から、「SはS'とR関係にある」に到達するのである。例えば原理1はこうなる。

P関係は、定義によりR関係である。

原理8. 隠喩の特殊事例として、換喩(metonymy: 事物を直接に指す代わりに、その属性、それと空間的・時間的に近い関係にあるものを用いるもの)・提喩(synecdoche: 一部で全体を、全体で一部を、特殊が一般を、一般が特殊を表す)の原理

これらの原理により、サールの考えていた隠喩解釈の全体像が見て取れるであろう。話し手は字義通りの意味(literal sentence meaning)を意図しておらず、隠喩的意味を意図している。そして聞き手が文を字義通りに受け取ると不自然であることから隠喩的意味に話し手の意図にあることに気づく。この不自然、というのは言うまでもなく、字義通りの意味が偽であったり、言うま

---

<sup>41</sup> Searle, 1979 p101 参照

でも無く明白に真であるという事実に基づくものと思われる。

以上が「隠喩」論文の概要である。さらに、この論文で注目したいのは、サールが隠喩文の真偽を字義通りの意味で判断せず、隠喩的意味の方で判断していることである。<sup>42</sup>

注意すべきは、どの場合についても、パラフレーズはどこか不適切で、何かが失われている感じがする、ということである。いかに軽微な隠喩の場合にもパラフレーズすると感じる、この不満な感じを説明することが、われわれの課題の一つとなろう。それでもある意味で、パラフレーズは話者の表意しているものをおおよそ言い当てているのでなくてはならない。なぜなら、どの事例においても、話者の隠喩的言明が真であるのは、パラフレーズ文を用いた対応する言明が真である場合に限られるからである。

隠喩文の真理値については文の字義通りの意味のほうで判断し、たいていは偽であるといわれることが多い。デイヴィドソンもそのような考えを持っている。ところが、隠喩の意味として残るのは隠喩的意味の方であり、隠喩的意味で真偽の判断をすべきだという考えも成り立つ。隠喩的意味において隠喩文の真偽を判断しようという考えは、菅野盾樹の『メタファーの記号論』にも見られる。

菅野は次のようにして、隠喩文の真理値は字義通りの意味でなく、隠喩的意味の方で判断すべきであるということを述べている。<sup>43</sup>

(8)アウル・ネルソンはゴリラだ。(M)

(9)アウル・ネルソンはゴリラだ。(L)

(M)は隠喩として発言された文、(L)は同じ言葉であるけれども、隠喩としてではなく、字義通りに発話された文である。隠喩として発話された(8)は字義通りの意味としての(9)をほのめかす。それは隠喩としての(8)と字義通りに断言される(9)とが似ていることによってそうなるのである。ところが、発話者はこの発話において(9)という断言をしているのではない。あくまでも(8)という隠喩を発話しているのである。そこで、菅野は字義通りの意味を取り上げて偽とする

---

<sup>42</sup> Searle 1979 P82 邦訳 91 頁

<sup>43</sup> 菅野 1985 p162 例文の番号は原著のまま。

のは間違いであると述べている。<sup>44</sup>

発言(8)には発言(9)が暗に意味ないし示されているが、しかしこの二つは明瞭に別のものであって両者の混同は隠喩の真理問題に関して收拾のつかぬ紛糾を持ちこむだろう。(8)は偽ではない。偽であるのは(8)において示された(9)の方なのである。しばしば論者は(8)を偽であるとして、隠喩は明らかな偽やノンセンスなど何かしら意味論的な欠陥を持つ文だという一般化を行うが、これは誤りである。そうであるのは隠喩の字義的解釈、したがって隠喩でないもの、(8)に対する(9)に相当する発言にすぎないのである。

ここでは、隠喩文がたいていは偽であるとされるのは間違いであるということが述べられている。それは隠喩において示される字義通りの意味が偽なのであって、隠喩文が偽なのではないからだ。では、隠喩にあたる(8)そのものは真なのが、偽なのか。菅野は続けて次のように述べている。<sup>45</sup>

具体的に言えば、(8)の真偽を解釈の初発段階((9)の解釈に相当する)で問題にするのは的外れであって、共有知識に依拠してなされる言外の意味計算を経て最後に呼び起こしによる(8)への有意性付与という最終段階において、初めて(8)の真偽を問うことが可能になるのだ。

隠喩文の場合、その解釈の出発点である字義通りの意味としての解釈段階ではなく、その最終段階である隠喩的意味としての解釈において真偽を問うことが可能になる、というのである。一般的には字義通りの意味が偽、隠喩的意味は真となる場合が多く、たいていの隠喩は隠喩的意味において真となるであろうが、勿論すべてが真とは限らない。隠喩的意味が偽である場合もありうる。それは、隠喩に限らず、字義通りの発話や隠喩ではないが間接的な意味を持つ発話においても同じことであるから、もし隠喩的意味が偽になったとしても問題はない。

以上に述べたように、隠喩においてたいていは隠喩的に意味している内容が真、文字通りに意味している内容が偽である。また次節のデイヴィッドソンの隠喩論のところで見るように、隠喩の隠喩的意味は命題的内容を持つものではなく、隠喩には字義通りの意味以上の意味もそれ

---

<sup>44</sup> 菅野 1985 p165

<sup>45</sup> 菅野 1985 p165

以下の意味もないのであって、むしろ隠喩の字義通りの意味が偽であるとみなされることや、あまりにも明白に真であることから他の見方やイメージなどに目を向けることに隠喩の隠喩たるゆえんがあるとすると<sup>46</sup>、隠喩の字義通りの意味内容はあまり重要でないように思える。そう考えると、隠喩の隠喩的意味がわかってしまえば、その後には字義的意味はもう必要ないのではなにかという疑念が生ずる。隠喩文の解釈のゴール地点が隠喩的意味であり、字義的意味が経由点にすぎないのなら、解釈の出発点であった隠喩の字義通りの意味は隠喩的意味に置き換えられて消えてしまうのだろうか？

後にデイヴィドソンの隠喩論のところでも述べるが、答えは否である。「隠喩」の中でサールは次のように述べている。<sup>47</sup>

なるほど、隠喩的発話は語や文の意味とは異なったことを意味する。しかしそれは、語彙要素の意味に何らかの変更があったからではなく、話者がそれを用いて別のことを表意しているからであり、即ち、話者の表意と文や語の意味とが一致しないからなのである。この点を見定めておくことは本質的に重要である。なぜなら、隠喩の中心的問題は、話者の表意と文の意味とがいかに異なり、それにも拘らずいかに関連しているかを説明することにあるからである。もし、隠喩的発話の中で文や語の意味がかわってしまった、と考えるならば、そのような説明は不可能になる。

サールは、隠喩を解釈する過程において隠喩的意味が文の意味に取って代わるのではなく、隠喩的意味と文の意味の両方が隠喩の意味であると考えている。仮に隠喩的意味が解った時点で隠喩を隠喩的意味に置き換え、文の意味を排除してしまったとしよう。そのとき、隠喩は隠喩でなくなるのだ。先に引用した記述の中で、サールが書いていたように「何かが失われる」のである。この点で、次節で取り上げるデイヴィドソンが、隠喩の働きは字義通りの意味を通して何か新しい見方やそれまで知られていなかったものを指し示す効果にあることを強調しているのは正しい。

会話の中ではなく、小説や詩に書かれた隠喩を考えてみよう。例えばシェイクスピアに「天国の眼(the eye of heaven)」という隠喩がある。これは文ではないが隠喩であるということで隠喩表現をしている部分だけを考えることにする。この隠喩の意味として残るものは隠喩的意味であ

<sup>46</sup> Davidson 1984 p257-258, 邦訳 281-282 頁

<sup>47</sup> Searle 1979 p87, 邦訳 97 頁

る「太陽(the sun)」である。しかし、字義通りの意味である「天国の眼(the eye of heaven)」がなくなってしまうわけではない。私たちはこの隠喩の部分を読み返すたびに字義通りの意味である「天国の眼(the eye of heaven)」から「太陽(the sun)」を連想することによって隠喩を味わうことができるのだ。隠喩は繰り返しても隠喩である。それゆえ隠喩の意味が隠喩の意味であるとしても、字義通りの意味もまた隠喩にとって必要なものなのである。

サールの隠喩論においては、文の字義通りの意味が意味であるだけでなく、話し手の発話意味である隠喩の意味もまた意味であるとされ、命題的に表現できるものとなっていた。そして字義通りの意味も隠喩の意味も隠喩の意味であるということに関してサールの述べていた重要な点は、話し手が字義通りの意味と違うことを意味するために字義通りの意味を使う、ということである。既に述べたように、隠喩的に表現された文の字義通りの意味はたいていは偽である。または明らかに真であることをわざわざ述べるというような表現の仕方をする。このような表現の仕方が、文意味のほかにもうひとつの意味があることを指し示し、聞き手は話し手の発話意味である隠喩の意味にたどり着くのである。隠喩を発話したり書いたりする話し手の目的は、隠喩の意味を意味することであり、話し手の意図は隠喩の意味にあるのである。

#### 4-3 デイヴィドソンの隠喩論

サールはグライスの含みという考え方をさらに進め、隠喩の意味をよりはっきりと話し手の発話意味として位置づけた。しかしそこには隠喩の意味を話し手の発話意味としてパラフレーズしてしまうと隠喩の持つ何か失われてしまうという問題があった。これに対し、その失われてしまう何か、即ち隠喩の持つ効果を重視して、隠喩論を展開したのが、デイヴィドソンである。デイヴィドソンは、隠喩の意味に目を向けさせる効果が隠喩の隠喩たるゆえんであり、隠喩の意味そのものは意味とは言えないとした。この点でデイヴィドソンは、グライスやサールのように隠喩の意味を命題の意味と捉える立場とは逆の立場をとっている。デイヴィドソンの隠喩論「隠喩の意味するもの」における最大の主張は「隠喩の意味は意味ではない」ということである。彼は比較説、相互作用説などの従来からある隠喩の意味についての考え方を隠喩の説明としては不十分なものであるとして否定する。これらの説が間違っているのは隠喩文に字義通りの意味の他に、隠喩の意味というような別の意味を想定していることにある、というのである。であるから、隠喩の意味というようなものを想定するのではなく、隠喩の意味はあくまでも字義通りの意味に

訴えて説明されるのでなければならないとする。隠喩文は字義通りの意味以上のことは何も意味していない。隠喩的意味と考えられているものは意味ではなく使用の領域に属するものであり、文の意味としては字義通りの意味で十分なのであるというのが、デイヴィドソンの考えである。しかし、このようなデイヴィドソンの考えは私達の直観に反するように思われる。日常経験からいうと、私達は隠喩的意味を隠喩文の意味と考えているからだ。例えば、

8. あなたは私のコーヒーの中のクリームだ。

と言った時に、この隠喩文の字義的意味は

8a. あなたは私のコーヒーの中に入れるクリームである。

であり、その隠喩的意味は

8b. あなたは私の誇りであり、楽しみだ。

である。この場合、聞き手にこの文の意味として把握されるのはどちらだろうか。それは隠喩的意味の方である。この場合聞き手は、「あなたは私のコーヒーの中のクリームなのだ」という内容に納得するのではなく、「あなたは私にとってコーヒーのクリームと同じように、誇りであり、楽しみなのだ」という内容を把握して初めて、この文に対して納得するのである。デイヴィドソンの字義通りの意味だけが意味であるという主張は私たちのこのような日常経験からくる直観に反するように思われる。

デイヴィドソンの考えも、デイヴィドソンが批判したそれぞれの考えも一様に文の字義通りの意味を第一義的に文の意味であることを前提としている。言い換えると、まずは隠喩文の字義通りの意味が先に意味としてあり、その上で、隠喩的意味を意味として認めるか認めないかという議論をしているように見えるのである。隠喩文の意味としてまずは字義通りの意味を認め、さらに隠喩的意味をも隠喩文の意味として認める、というのが、デイヴィドソンに批判された諸説の考え方であり、字義的意味だけしか、隠喩文の意味として認めない、というのがデイヴィドソンの立場である。

では隠喩的意味が意味でないとすると、デイヴィドソンは隠喩的意味についてどう説明するの

だろうか。隠喩は、意味なのではなく用法であるとデイヴィッドソンは言う。少し長くなるが引用してみよう。<sup>48</sup>

私那不賛成なのは、隠喩はどのようにしてその素晴らしい効果をもたらすのか、ということについての説明に関わる。前もって言ってしまえば、私は、言葉が何を意味するかということと、言葉は何をするために使用されるかということとの区別に依拠している。隠喩は専ら使用(use)の領域に属す、と考える。隠喩とは、語や文を想像力に富んだ仕方で用いることによって成し遂げられる何ごとかなのであり、これらの語の通常の意味にのみ、それゆえ、そういった語から成る文の通常の意味にのみ依存するのである。

隠喩的意味とか比喩的意味とかを措定しても、あるいは詩的真理とか隠喩的真理という特殊な種類の真理を措定しても、言葉が隠喩においてどのように作用しているかを説明するのには何の役にも立たない。こういうことを考えても隠喩の説明にはならず、[かえって]隠喩の方がこういう考えを説明するのである。一旦隠喩を理解してしまえば、その理解したことを「隠喩的真理」と呼ぶこともできるし、また(ある程度までは)その「隠喩的意味」が何かを述べることもできる。しかし、ただ隠喩に隠喩的意味を授けるというだけでは、ある錠剤がなぜ人を眠らせるのかということ、これには催眠力があるからだと言って説明するようなものである。

隠喩的意味をあらかじめ措定してしまうと、隠喩が隠喩的意味をもたらすのは、隠喩的意味というものがあからだということになってしまう、ということであろう。デイヴィッドソンの言うように確かに隠喩的意味と隠喩の作用とは別物である。隠喩の作用により、得られた内容が隠喩的意味と呼ばれるものである。いわば、隠喩的意味は隠喩の働きの結果得られるものなのである。だが、その隠喩的意味が得られるのはなぜかと考えてみたときに、隠喩的意味は、隠喩が表現されると同時に存在するのだということが分かる。発話者は隠喩的意味を目指して隠喩を発話し、聞き手は字義的意味を経由して発話者の意図した隠喩的意味にたどり着くのである。もし、隠喩的意味が発話の段階で存在せず、聞き手が理解した段階ではじめて存在するとすれば、その隠喩的意味は聞き手が作り出したものであり、隠喩的意味は伝達されないことになるだろう。しかし、実際に隠喩を発話し、または書き、発話者が伝えようとしていた隠喩的意味を聞き手や読

---

<sup>48</sup> Davidson 1978 p247, 邦訳 265 頁

み手が理解するということがある以上、初めから存在するものなのである。

デイヴィッドソンが隠喩の働きであり使用の領域に属すると言っているものは隠喩的意味ではなく、隠喩的意味に私達を向かわせる作用のことである。そのような隠喩の作用を言うならば、それは隠喩的意味を示唆したり、ほのめかしたり、隠喩的意味を際立たせることである。隠喩が使用の領域に属するというのはそのとおりである。しかし、それは隠喩的意味が意味でないということではない。使用の領域に属するのはむしろ、発話者が隠喩的意味を効果的に伝えるために隠喩という間接的な表現を用いることの方なのだ。

デイヴィッドソンが隠喩的意味を意味と認めない理由はもう一つある。それは隠喩的意味が多様でありすぎるために意味を確定できない、という理由である。<sup>49</sup>

最も単純な隠喩の場合でさえ、その内容が何であると考えられているかを正確に決定するのがかくも困難である、ということが、先の理論に疑いを抱かせるのであろう。決定するのがしばしばそんなにも困難になる理由は、思うに、実際は、隠喩が何に気づかせてくれるのか、に注意を集中しているのに、その間中ずっと、捉えられるべき内容があるのだと想像している、ということにあるのである。隠喩が気づかせてくれるものが、範囲に関しては有限で、性質に関しては命題的なものであるとするなら、この[内容の決定という]ことがそれ自体として困難を惹き起こすことはないだろう。われわれは、隠喩が思い起こさせた内容をその隠喩の上へとただ投影するだけでよいことになろう。ところが実際は、隠喩がわれわれの注意を呼び起こすものには限りがないのだし、気づかせられるものの大部分は、命題的な性格のものではないのである。隠喩が何を「意味している」のかを述べようとする直ぐに、言及しておきたいことには終りが無いのだと気づくことになる。

これは不確定性の問題でもある。デイヴィッドソンは引用の中で、隠喩によって私たちが気づかせられるものの大部分は命題的な性格のものではないと述べているが、命題的な性格のものに限っても隠喩の解釈はさまざまに考えることができる。したがって選択肢がありすぎて隠喩的意味を確定できない、という事態はあるだろう。<sup>50</sup>また、デイヴィッドソンの考えでは隠喩によって気づかせられるものの大部分はそもそも命題的なものではないから、不確定になるのである。し

---

<sup>49</sup> Davidson 1985 p262-263, 邦訳 289-290 頁

<sup>50</sup> グライスもこの不確定性の問題があることを「論理と会話」の最後の部分で含みの特徴として指摘している。

かし、意味が不確定であるという問題は実は隠喩に限ったことではなく、含みや慣習の意味にも存在すると考えられるし、意味が多様で確定できないということは、実際にはそれほど問題でないと思われる。なぜならば、実際に私達は何らかの方法で隠喩の意味を確定し、隠喩の意味の伝達を行っているからだ。実態は、そこに隠喩の意味を確定する一般的な規則や原則が存在せず、アド・ホックに意味を確定している、ということであろうと思われる<sup>51</sup>。そして、むしろアド・ホックであることがこのような意味特定の特徴である。このため、グライス理論も含め、話し手意味 (speaker's meaning) について論じようとする内容が多岐にわたるのである。

私の考えは字義の意味ではなく、隠喩の意味こそ隠喩文の中心の意味であるというものだ。その一つの根拠は前章に示した。グライスの意味の理論に沿った考え方である。即ち、話し手の伝えようとする意図は隠喩の意味のほうにあり、話し手は隠喩の意味の方を非自然的に意味している、ということである。

この考えをもう少し詳しく述べてみよう。

話し手は隠喩の意味を意図し、隠喩の意味を非自然的に意味するのである。便宜的に隠喩の意味を字義通りの意味と隠喩の意味に分けて考えるとすると<sup>52</sup>、話し手は隠喩の意味を伝えるために、(字義通りの意味を持つ) 文を発話するのである。

例えば走るのが遅い女の子が「あたしは亀なの」と言ったとしよう。

ここで字義の意味と隠喩の意味を分けて書いてみると次のようになる。

16.

発話:「あたしは亀なの」

字義の意味:「私は亀である」

隠喩の意味:「私は亀のように走るのが遅い。」<sup>53</sup>

ここで話し手が言いたいことは隠喩の意味の「私は亀のように走るのが遅い」の方である。話し手は隠喩の意味「私は亀のように走るのが遅い」を言うために、字義通りの意味「私は亀であ

<sup>51</sup> 意味確定の規則がその都度アド・ホックに形成されるという立場で、伝達・解釈の理論を展開したのが、スペルベルとウィルソンの関連性理論である。

<sup>52</sup> 隠喩の意味と字義通りの意味を分けて考えるのは便宜である。私達が実際にいつも字義通りの意味と隠喩の意味を分けて意識しながら発話したり、理解しているわけではない。

<sup>53</sup> 走るのが遅いことを「亀」に喩えるのは日本語においては死喩であろうが、ここではこのまま話を進める。

る」を使うのだ。それで、字義通りの意味「私は亀である」を持つ文「あたしは亀なの」を発話するのである。「私は亀である」という字義通りの意味を持っていれば、発話される文は「私は亀なのです」でも、「私は亀なんです」でもよい。同じ字義通りの意味を持つ他の文に言い換えたとしても、隠喩としての効果は変わらないと考えられるからだ。

聞き手の側から言えば、聞き手は最初に発話「あたしは亀なの」の字義通りの意味「私は亀である」を認識する。それから字義通りの意味が事実ではないことから他の解釈を探し、隠喩的意味「私は亀のように走るのが遅い」にたどり着くのである。

このように考えてくると、隠喩文の真偽をどこで問うのか、という問題についても隠喩文の意味を字義通りの意味と取るか、隠喩的意味と取るかによって違いが生じることになる。

デイヴィッドソンは、隠喩文の意味は字義通りの意味であると考えるので、「隠喩の現れている文は、普通の、字義通りの仕方で、真または偽となる」、「もし隠喩的に用いられた文が通常の意味で真か偽になるとすればたいていは偽になる」<sup>54</sup>と考える。しかし、重要なのは隠喩文が字義通りの意味で真であったり、偽であったりすることではない。それがたいていの場合字義通りの意味で偽であり、隠喩文が偽とみなされることであると言う。<sup>55</sup>

一般的に、文が隠喩と受け取られ、その隠れた含みが捜し求められ始めるのは、その文が偽と見なされるときに限ってのことである。おそらく、この理由で、ちょうど、直喩がすべて自明的に真なのと同じように、ほとんどの隠喩はだれの目にも明らかなほど明白に偽なのであろう。隠喩的な文における不条理や矛盾が、その文をわれわれが信じはしないことを保証し、また、適当な状況の下では、その文を隠喩的に受け取るようにと誘うのである。

ここはもう既に見たグライスの含みの理論に通ずる考え方である。字義通りの意味は聞き手が隠喩的意味を探し始めるきっかけとなるものなのである。文の字義通りの意味は隠喩解釈のスタート地点であり、ゴールではないのだ。聞き手は字義通りの意味から出発して、それとは違う隠喩的意味を探し始める。そして、隠喩的意味を把握して初めて隠喩解釈は完了するのである。その過程は今までに見てきたとおりである。

後に、デイヴィッドソンは「隠喩の意味するもの」で、文の字義通りの意味だけか意味であるとしたことを訂正し、そのように主張したのは「最初の意味」(first meaning)の重要性をいいたかった

<sup>54</sup> Davidson 1985 p257, 邦訳 280 頁

<sup>55</sup> Davidson 1985 p258, 邦訳 282 頁

のだとしている。<sup>56</sup> ここでデイヴィッドソンが述べている「最初の意味」とは次のようなものである。

57

行為がなされる意図には順序がある。それらの意図は行為者が目指している目的に対する手段の関係の上に築かれる連鎖を構成する。かくして、ある者が、手を動かすのは紙の上でペンを動かすためであり、それは自分の名前を書くためであり、それは伝票にサインをするためであり、それは勘定を払うためで、それは……(中略)……このつながりにおいて、語が意味するもの、または意味するように意図されているものと関係のある最初の意図が発話の意図であり、解釈者はそれにある意味を割り当てるであろう。私はこれを最初の意味と呼ぶ。

デイヴィッドソンの言うところでは、発話には鎖のようにつながったたくさんの意図があるのだ。そして、その最初の意図がその語を発する意図であり、その語に聞き手が何らかの解釈をして意味を割り当てる、というのである。さらに、デイヴィッドソンは「最初の意味」について次のように説明する。<sup>58</sup>

最初の意味は二つの側面で最初である。それは話し手や書き手の語義上の意図において最初に来るものであるし、ある場合に使用された語が意味するものへの全てのさらなる探求に必要な土台である。あなたはシェイクスピアが「天国の眼(the eye of heaven)」によって意味したものを、普通の意味での「眼(eye)」を知らなければ把握し始めることはないであろう。そしてシェイクスピアはあなたに、自分の言葉の普通の意味を理解することによってこの隠喩を理解するよう意図しているのだ。

ここからみると、「最初の意味」というのは字義通りの意味に近いものであると言えそうである。「隠喩の意味するもの」の時には、デイヴィッドソンは字義通りの意味だけしか意味として認めていなかった。しかし、「最初の意味」は聞き手の側からいうと、さらなる語の意味への探求の基礎となるのである。従って、この段階で、デイヴィッドソンは字義通りの意味以外の意味をも言葉の意

---

<sup>56</sup> Davidson 1992 p307 note 4

<sup>57</sup> Davidson 1992 p300

<sup>58</sup> Davidson 1992 p301

味として認める立場に変化していると考えられる。これを隠喩に適用すれば、聞き手は隠喩の字義的意味、すなわち「最初の意味」から出発し、隠喩的意味へと解釈を進める、と考えることができる。

実際、デイヴィドソンは先の「最初の意味」の定義に続けてこの概念をシェイクスピアの隠喩を例にとって次のように説明している。<sup>59</sup>

最初の意味という概念の有用性は、言明されたり、含意されたことが語の意味するものと違う場合を考えるとときに現れる。「時として余りにも熱く天国の眼は輝く(Sometime too hot the eye of heaven shines)」は太陽が時として余りにも明るく輝くことを意味している。しかし「天国の眼(the eye of heaven)」の最初の意味は一つのしかも唯一の天国の眼を呼び起こそうとしている。私達はこれが次のような理由からだといえる。読者に太陽を意味しているのだという理解を促すために、一つのしかも唯一の天国の眼(そのようなものが存在するとして)を呼び起こすよう認識される言葉を使おうと、シェイクスピアは意図しているということである。私達は「意味」という言葉を最初の意味と隠喩がもたらすものの両方に使いたいと思うかもしれない。しかし、最初の意味だけが作者の言語において体系的な場所を持っているのである。

この引用部分からすると、「天国の眼(the eye of heaven)」の最初の意味はその字義通りの意味であり、読者はその最初の意味から出発してシェイクスピアが太陽を意味したことを理解するのである。最初の意味である字義通りの意味は隠喩的意味を探し始め、隠喩的意味にたどりつくためのきっかけである。それならば、なおさら隠喩文の意味は字義通りの意味ではなく、隠喩的意味のほうに在ると考えてもよいだろう。

デイヴィドソンは「隠喩の意味するもの」においては字義通りの意味だけを隠喩的な文の意味と認める立場であった。後には隠喩的意味も意味と認める立場に変化したが、最初の意味としての字義通りの意味を重視する姿勢は変えていない。これまで、デイヴィドソンの隠喩論に対して隠喩的意味が隠喩の意味であるということを主張してきたように、隠喩の意味の中心は隠喩的意味である。しかし、字義通りの意味がなければ聞き手は隠喩的意味を探すことも、隠喩的意味にたどり着くこともできないのである。例えて言えば、字義通りの意味は隠喩的意味の身体<sup>からだ</sup>

---

<sup>59</sup> Davidson 1992 p300

なのであり、字義的意味という身体が隠喩的意味という言葉が発するのである。この字義通りの意味という身体がなければ、聞き手は隠喩的意味という言葉を書くことはできないのだ。デイヴィドソンの隠喩論の意義の一つはこのような字義通りの意味の重要性を強調した点にあるとっていいだろう。

デイヴィドソンの隠喩論でさらに重要なのは隠喩的意味よりも、隠喩の効果を強調した点である。サールの隠喩論のところでも見たように、隠喩的意味を命題的なものとして認め、それを命題的に書き換えてしまうと、隠喩の持つ何かが失われてしまう。隠喩的意味を説明してしまえるのなら、なぜ、直接表現せずに、隠喩という遠まわしな表現をするのかという疑問に答えられなくなるからだ。この点から言うと、デイヴィドソン言う、「注意を向けさせ」たり「おもいださせ」る「隠喩の効果こそが隠喩の隠喩たる所以であると言えるだろう。

## 結論

第3章と第4章を通して、グライスの理論から、また、隠喩的意味に関するサールとデイヴィドソンの議論から、隠喩的意味が非自然的に意味されているのであり、場面意味であるということを見てきた。では、隠喩以外の会話の含みも発話者の場面意味となりうるのだろうか？ 2-1で「非慣習的に含みとされたことは場面意味になるのだろうか？」という問いを提示し、第3章第4章と隠喩的意味についての考察を通して、検討してきた。その結果、隠喩的意味が場面意味となることは既に見たとおりである。隠喩的意味は含みであるから、それが場面意味となるということは、会話の含みについても場面意味になりうるということができよう。少なくとも、隠喩の場合には、含みが場面意味となるからである。では、隠喩以外の会話の含みについては場面意味となりうるのだろうか？ 皮肉については隠喩と同様のことが言えるだろう。しかし、会話の含みには、隠喩、皮肉以外にもたくさんの事例がある。そこで、本節では、第2章でも触れたように、隠喩以外の会話の含みも場面意味になりうるのかどうかを簡単に検討してみたい。

そのためにグライスが会話の含みの例としてあげているいくつかの例を使う。<sup>60</sup>会話の言葉（発話された文）に含みを併記し、それが話し手から意図され得るのか、発話者の場面意味となり得るのかどうかを考えてみよう。

例の中で、Aは聞き手の言葉、Bは話し手の言葉であり、慣習的意味である。B'はBの含みとなっている内容である。

1. A: ガソリンを切らしてしまった。  
B: あそこにガソリンスタンドがある。  
B': そのガソリンスタンドはたぶん営業中で、そこでガソリンを入れられる。
  
16. A: スミスはこのところ女友達がいないうだ。  
B: 彼は近頃ひんぱんにニューヨークに出掛けている。  
B': ニューヨークにスミスの女友達がいる(のかもしれない。)

---

<sup>60</sup> 例文の 1. 15. 2. 16. 17. はいずれもグライスの『論理と会話』に挙げられている例である。  
Grice 1991 p32-34, 46-49 頁

2. A:Cはどこに住んでいるんだ。

B:南フランスのどこかだ。

B':どの町に住んでいるのかは知らない。

17. 哲学の教官職に応募する学生についての推薦状

B:「前略。X君は日本語に堪能であり、また個別指導にはいつも出席しております。草々。等々」。

B':X君は哲学についてはあまり有能ではありません。

18. 皮肉

B:Xはいい友達だ。

B':Xはひどい奴だ。

19. B:この部屋は寒いね。

B':戸を閉めてくれ。

これらの例の中でB'に示した会話の含みは果たして話し手が場面意味として意味し得るものであろうか。それを確かめるために話し手がB'を意図してBを発言したと仮定してみよう。そしてB'が非自然的意味の必要条件である3つの意図を満たしているならば、B'、即ち含みが場面意味となり得るといえるだろう。

このとき、話し手がB'を意図してBを発話したと仮定し、非自然的意味の必要条件である

- ①話し手は聞き手にB'という信念を抱かせようと意図している。
- ②話し手は聞き手に①を認識させようと意図している。
- ③話し手は聞き手が①を認識すること(=②)によって①が達成されることを意図している。

という三つの意図の条件が満たされていればよい。

勿論、話し手は②の意図の下にBを発話していることになるわけである。さらに言えば、聞き手がBという発話を通して話し手のB'という信念を抱かせようという意図を認識し、B'という信念を聞き手が抱くことを意図している、ということになる。

例えば最初のガソリンスタンドの例はどうであろうか。

この例の会話の含み、B´は

B´: そのガソリンスタンドはたぶん営業中で、そこでガソリンを入れられる。

である。話し手がこのB´を意図していると仮定し、先に挙げた三つの意図の条件に当てはめると次のようになる。

①話し手は、

B´: そのガソリンスタンドは多分営業中で、そこでガソリンを入れられる。

という信念を抱かせようと意図している。

②話し手は、

B: あそこにガソリンスタンドがある。

という発話を通して聞き手に①を認識させようと意図している。

③話し手は、

聞き手が①を認識すること(=②)によって①が達成されることを意図している。

これらの意図の条件は成り立つと考えられる。このように、話し手が含みを聞き手に信念として抱かせることを意図するならば、含みを非自然的に意味することができるのである。他の例についても事情は同様である。特に最後の三つの例などは含みを意図している可能性のほうが大きい例だろう。そして、なおかつどの例においても話し手が含みの方を意図し得ない、ということはないように思われる。であるから、特殊な会話の含みについては、非自然的に意味され、発話者の場面意味になり得ると考えてよい。このように含みを持つ表現の中には発話された文の無時間的意味よりも、含みのほうが場面意味となっている例は少なくないと考えられる。勿論、発話された文の無時間的意味が場面意味となっており、含みはあくまでも付加的なものであって場面意味とはなっていないという例もあるだろう。

グライスの言語哲学において、意味の理論は発話の意味を場面意味に還元し、発話者の意図によって説明するというものである。また、含みの理論は文の意味の概念をその直接的な無時間的意味から間接的な意味にまで拡張し、はっきりとは言い表されていないが話し手の意味

しようとするところを掬い取るという役割を果たしている。本論文では、グライスの言語哲学について、第1章でグライスの含みの理論と意味の理論について概観した。前述のように非自然的意味と含みとをグライスは明確に関係付けてはいないのだが、第2章ではグライスの言う「意味作用の全体」を参考に、グラス言語哲学の全体像について考察した。

この考察から、慣習的に意味されたことが場面意味となることが示され、さらに非慣習的に含みとされたことが場面意味になりうるのかどうかを確かめるために、第3,4章で隠喩の意味について場面意味となるのかどうかを検討した。隠喩の意味は場面意味になるということがこの考察の結果得られた結論である。

隠喩の意味はグライス理論においては特殊な会話の含みであり、したがって、隠喩の意味が場面意味となるということは特殊な会話の含みが場面意味となるということが示されたに過ぎない。一方、第2章で取り上げた意味作用の全体の中の非慣習的に含みとされたことの中には、特殊な会話の含みのほかに、一般的な会話の含み<sup>61</sup>と会話の含み以外の非慣習的な含みがある。一般的な会話の含みについてはこの論文では検討しなかった。また、会話の含み以外の非慣習的な含みについては、グライスもその内容を明らかにしていないのでこれも検討していない。

けれども、特殊な会話の含み、特に隠喩の意味が場面意味となることを明らかにしたことによってグライス言語哲学の意味作用の全体像について、より明らかになったと思われる。また、グライス理論の中で、説明がうまくいかなかった隠喩や皮肉についての問題も、これらの含みが場面意味であるということを明確にすることによって整理が出来たと考えている。

---

<sup>61</sup> 本論文P2、注1を参照。

## 参考文献

Avramides, A. (2001), 'Davidson, Grice, and the social aspects of language'. In Cosenza 2001

Cosenza, G. (2001), *Paul Grice's Heritage*. Brepols Turnhout.

Dasenbrock, R. (1993), *Literary Theory After Davidson*. The Pennsylvania University Press.

Davidson, D. (1992), 'Locating Literary Language' In Dasenbrock 1993

Davidson, D. (1978), 'What Metaphors Mean' In Davidson 1984

Davidson, D. (1984), *Inquiries into Truth and Interpretation*. Oxford University Press. (野本和幸他訳 『真理と解釈』,勁草書房, 1991.)

Davis, W. (1998), *Implicature*.: Cambridge University Press.

Grice, P. (1968), 'Utterer's Meaning, Sentence-Meaning, and Word Meaning'. In Grice 1991.

Grice, P. (1969a), 'Utterer's Meaning and Intention'. In Grice 1991.

Grice, P. (1969b), 'Meaning'. In Grice 1991.

Grice, P. (1975), 'Logic and Conversation'. In Grice 1991.

Grice, P. (1978), 'Further Notes on Logic and Conversation'. In Grice 1991.

Grice, P. (1981), 'Presupposition and Conversational Implicature'. In Grice 1991.

Grice, P. (1982), 'Meaning Revisited'. In Grice 1991.

Grice, P. (1991), 'Indicative Conditionals'. In Grice 1991.

Grice, P. (1991), 'Some Models for Implicature'. In Grice 1991.

Grice, P. (1991), *Studies in the Way of Words*. : Harvard University Press. (清塚邦彦訳『論理と会話』,勁草書房, 1998.)

深谷昌弘・田中茂範 (1996), 『コトバの<意味づけ論>』, 紀伊國屋書店.

飯田隆 (2002), 『言語哲学大全IV』, 勁草書房.

川口由起子 (2001), 「グライス理論における協調原理と格率一般との論理的関係」, 『科学哲学』34-2: 101-116.

松本曜 編 (2003), 『認知意味論』, 大修館書店

森本浩一(2004), 『デイヴィドソン』, NHK 出版.

Neale, S. (1992) "Paul Grice and the Philosophy of Language" *Linguistics and Philosophy* 15

菅野盾樹 (1985),『メタファーの記号論』,勁草書房

佐々木健一 編訳 (1986), 『創造のレトリック』, 勁草書房.

Searle, J. (1979), 'Metaphor'. In Searle 1979(渡辺裕訳「隠喩」 佐々木健一編訳『創造のレトリック』所収)

Searle, J. (1979), *Expression and meaning*. Cambridge University Press.

Sperber, D and Wilson, D. (1995), *Relevance: Communication and Cognition Second Edition*.  
Oxford : Blackwell. (内田聖二他訳、『関連性理論(第2版)—伝達と認知—』, 研究社, 1999.)

山田友幸 (2002). 「書評 ポール・グライス著, 清塚邦彦訳, 『論理と会話』」, 『科学哲学』35-1:  
101-107.